

# 大齋期の火曜日早課(抄)

注意 譜面中、五線譜上に ||o|| とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞(祈禱文)が持つ言葉の自然なリズムに則つて歌うことを意味しています。ただ早く歌つてしまつたり、棒読みになつてしまつたりしないよう、氣をつけてください。この聖歌譜はそのために、歌詞の意味をとることが容易になるよう漢字を多く用いて作成しています。



【 早課 (晩堂課から続けて行う時は4ページの【 六段聖詠 】から) 】

司祭) われら かみ つね あが ほ いま いつ よよ  
我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、



アミン。

誦經) われら かみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き  
我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

てん おう なぐさ もの しんじつ しん あ ところ もの み ところ もの ばんぜん  
天の王、慰むる者よ、眞實の神、在らざる所なき者、満たざる所なき者よ、萬善

ほうぞう もの せいめい たも しゅ きた われら うち お われら もろもろ けがれ  
の寶藏なる者、生命を賜うの主よ、來りて我等の中に居り、我等を諸の穢より

いさぎよ しぜんしゃ われら たましい すく たま  
潔くせよ、至善者よ、我等の靈を救い給え。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。アミン。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち ゆる  
至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を赦

せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ  
せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ  
主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。アミン。

てん いま われら ちち ねが なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん  
天に在す我等の父よ、願わくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天

おこな ごと ち おこな わ にちよう かつて こんにちわれら あた たま われら おいめ  
に行わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に債

もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いざない みちび なおわれら  
ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我等を

きょうあく すく たま  
凶 悪より救い給え。

司祭) けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
蓋 國と權能と光榮は 爾 父と子と聖 神に歸す、今も何時も世に。



誦經) しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ  
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光 榮は父と子と聖 神に歸す、今も何時も世に。アミン。

きた われら おう かみ こうはい  
來れ、我等の王・神に叩 拜せん、

きた われら おう かみ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王・神に叩 拜俯伏せん、

きた われら おう かみ まえ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩 拜俯伏せん、

## 【 第19聖詠 】

誦經) ねが しゅ うれい ひ おい なんぢ き かみ な なんぢ ふせ まも ねが  
願わくは主は 憂 の日に於て 爾 に聽き、イアコフの神の名は 爾 を扨ぎ衛らん。願わ

くは せいしょ たすけ なんぢ つかわ なんぢ かた ねが なんぢ ことごと  
くは聖 所より 助 を 爾 に 遣 し、シオンより 爾 を 固めん。願わくは 爾 が 悉 くの

ささげもの きおく なんぢ やきまつり こ もの ねが しゅ なんぢ ころ したが  
獻 物を記憶し、 爾 の 燔 祭 を 肥えたる物とせん。願わくは主は 爾 の 心 に 循 いて

なんぢ あた なんぢ はか ところ ことごと と われら なんぢ すくい よろこ わ かみ な  
爾 に與え、 爾 の 謀る 所 を 悉 く 遂げしめん。我等は 爾 の 救 を 喜び、我が神の名

よ はた あ ねが しゅ なんぢ ことごと ねがい じょうじゅ いまわれしゅ その  
に依りて 旗 を 揚げん。願わくは主は 爾 が 悉 くの 願 を 成 就 せしめん。今我主が其

あぶら もの すく し かれ せいてん そのすくい みぎ て ちから もつ これ きた  
け 膏 つられし者を 救 うを 知れり、彼は 聖 天より 其 救 の 右の手の 力 を 以て之に對う。

あるい くるま もつ あるい うま もつ ほこ もの ただわれら しゅわ かみ な もつ ほこ かれ  
或 は 車 を 以て、或 は 馬 を 以て 誇る 者あり、唯 我等は主我が神の名を 以て 誇る、彼

ら うご たお ただわれら お なお た しゅ おう すく またわれら なんぢ よ とき  
等は 動きて 顛れ、唯 我等は 起きて 直く 立つ。主よ、王を 救え、又 我等が 爾 に 呼ばん時、

われら き たま  
我等に 聽き 給え。

## 【 第20聖詠 】

しゅ おう なんぢ ちから たのし なんぢ すくい よろこ きわま そのころ のぞ ところ  
主よ、王は 爾 の 力 を 樂み、 爾 の 救 を 歡ぶこと 極りなし。其 心 に 望む 所

なんぢこれ あた そのくち もと ところ なんぢこれ いな けだしなんぢ じんじ しゆくふく  
は、 爾 之を 與え、其 口 に 求むる 所 は、 爾 之を 辭まざりき。蓋 爾 は 仁慈の 祝 福

もつ かれ むか じゅんきん かんむり そのこうべ こうむ かれいのち なんぢ もと なんぢ  
を 以て 彼を 迓え、純 金 の 冠 を 其 首 に 冠 せたり。彼 生命 を 爾 に 求めしに、 爾

これ よよ ことぶき たま かれ さかえ なんぢ すくい もつ おおい なんぢ せんえい いげん  
之に 世の 壽 を 賜えり。彼の 榮 は 爾 の 救 を 以て 大なり、 爾 は 尊 榮と 威 嚴と

これ こうむ なんぢ しゆくふく よよ たま なんぢ かんばせ よろこび かれ たのし  
 を之に被<sup>ら</sup>せたり。爾<sup>は</sup>祝<sup>福</sup>を世<sup>世</sup>に賜<sup>い</sup>、爾<sup>が</sup>顔<sup>の</sup>歡<sup>にて</sup>彼<sup>を</sup>樂<sup>ませ</sup>  
 たり。蓋<sup>し</sup>王<sup>は</sup>主<sup>を</sup>頼<sup>み</sup>、至<sup>上</sup>者<sup>の</sup>仁<sup>慈</sup>に因<sup>りて</sup>動<sup>か</sup>ざらん。爾<sup>の</sup>手<sup>は</sup>爾<sup>が</sup>悉<sup>く</sup>  
 の敵<sup>を</sup>尋<sup>ね</sup>出<sup>し</sup>、爾<sup>の</sup>右<sup>の</sup>手<sup>は</sup>凡<sup>そ</sup>爾<sup>を</sup>憎<sup>む</sup>者<sup>を</sup>尋<sup>ね</sup>出<sup>さん</sup>。爾<sup>怒</sup>る時<sup>彼</sup>等<sup>を</sup>  
 火<sup>爐</sup>の如<sup>く</sup>なさん、主<sup>は</sup>其<sup>怒</sup>に於<sup>て</sup>彼<sup>等</sup>を滅<sup>し</sup>、火<sup>は</sup>彼<sup>等</sup>を齧<sup>まん</sup>。爾<sup>は</sup>彼<sup>等</sup>の果<sup>を</sup>  
 地<sup>より</sup>絶<sup>ち</sup>、彼<sup>等</sup>の種<sup>を</sup>人<sup>の子</sup>の中<sup>より</sup>絶<sup>たん</sup>、蓋<sup>し</sup>彼<sup>等</sup>は爾<sup>に</sup>向<sup>いて</sup>惡<sup>事</sup>を企<sup>て</sup>、  
 謀<sup>を</sup>設<sup>けた</sup>れども、之<sup>を</sup>遂<sup>ぐる</sup>こと能<sup>わ</sup>ざりき。爾<sup>彼</sup>等<sup>を</sup>立<sup>て</sup>て的<sup>とな</sup>し、爾<sup>の</sup>弓<sup>を</sup>  
 以<sup>て</sup>矢<sup>を</sup>其<sup>面</sup>に發<sup>たん</sup>。主<sup>よ</sup>、爾<sup>の</sup>力<sup>を</sup>以<sup>て</sup>自<sup>ら</sup>擧<sup>れ</sup>、我<sup>等</sup>は爾<sup>の</sup>權<sup>能</sup>を  
 歌<sup>頌</sup>讚<sup>榮</sup>せん。

光<sup>榮</sup>は父<sup>と</sup>子<sup>と</sup>聖<sup>神</sup>に歸<sup>す</sup>、今<sup>も</sup>何<sup>時</sup>も世<sup>世</sup>に、アミン。

主<sup>よ</sup>、爾<sup>の</sup>民<sup>を</sup>救<sup>い</sup>、爾<sup>の</sup>嗣<sup>業</sup>に福<sup>を</sup>降<sup>せ</sup>、爾<sup>の</sup>十<sup>字</sup>架<sup>にて</sup>爾<sup>の</sup>住<sup>所</sup>を護<sup>り</sup>

給<sup>え</sup>。

光<sup>榮</sup>は父<sup>と</sup>子<sup>と</sup>聖<sup>神</sup>に歸<sup>す</sup>、

甘<sup>ん</sup>じて十<sup>字</sup>架<sup>に</sup>擧<sup>げ</sup>られしハリス<sup>ト</sup>ス神<sup>よ</sup>、爾<sup>が</sup>同<sup>名</sup>の<sup>新</sup>なる住<sup>所</sup>に爾<sup>の</sup>惠<sup>を</sup>

垂<sup>れ</sup>給<sup>え</sup>、爾<sup>の</sup>力<sup>を</sup>以<sup>て</sup>此<sup>を</sup>樂<sup>ませ</sup>、其<sup>諸</sup>敵<sup>に</sup>勝<sup>た</sup>しめ給<sup>え</sup>、此<sup>爾</sup>が和<sup>平</sup>の

武<sup>器</sup>、勝<sup>た</sup>れぬ勝<sup>を</sup>以<sup>て</sup>其<sup>助</sup>とすればなり。

今<sup>も</sup>何<sup>時</sup>も世<sup>世</sup>に、アミン。

威<sup>嚴</sup>にして耻<sup>を</sup>得<sup>しめ</sup>ざる轉<sup>達</sup>、至<sup>善</sup>にして讚<sup>詠</sup>せらるる生<sup>神</sup>女<sup>よ</sup>、我<sup>等</sup>の祈<sup>禱</sup>を

斥<sup>け</sup>ず、正<sup>教</sup>の<sup>人</sup>の住<sup>所</sup>を固<sup>め</sup>、天<sup>より</sup>勝<sup>利</sup>を與<sup>え</sup>給<sup>え</sup>、獨<sup>恩</sup>籠<sup>に</sup>滿<sup>た</sup>さるる

者<sup>よ</sup>、爾<sup>は</sup>神<sup>を</sup>生<sup>み</sup>たればなり。

【 重聯禱 】

司<sup>祭</sup>神<sup>よ</sup>、爾<sup>の</sup>大<sup>なる</sup>憐<sup>に</sup>因<sup>りて</sup>我<sup>等</sup>を憐<sup>め</sup>よ、爾<sup>に</sup>禱<sup>る</sup>、聆<sup>き</sup>納<sup>れて</sup>憐<sup>め</sup>よ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
 主 憐 主 憐 主 憐

司<sup>祭</sup>又<sup>吾</sup>が國<sup>の</sup>天<sup>皇</sup>及<sup>び</sup>國<sup>を</sup>司<sup>る</sup>者<sup>の</sup>爲<sup>に</sup>禱<sup>る</sup>、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>またきょうかい</sup>又 <sup>つかさど</sup>教 會 <sup>そんき</sup>を <sup>われら</sup>司 <sup>ぜんにつぼん</sup>る <sup>ふしゅきょう</sup>尊 貴 <sup>そんき</sup>なる <sup>われら</sup>我 等 <sup>せんだい</sup>の <sup>せん</sup>全 <sup>だい</sup>日 本 <sup>の</sup>の <sup>せん</sup>府 主 <sup>の</sup>教 官 <sup>の</sup>ダニエル、<sup>の</sup>尊 貴 <sup>の</sup>なる <sup>の</sup>我 等 <sup>の</sup>の <sup>の</sup>仙 台

<sup>だいしゅきょう</sup>の <sup>たい</sup>大 <sup>いの</sup>主 教 <sup>の</sup>セラフィムの <sup>の</sup>爲 <sup>に</sup>に 禱 <sup>る</sup>る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>またしゅうけいていおよ</sup>又 <sup>しゅう</sup>衆 兄 弟 <sup>の</sup>及 <sup>の</sup>び <sup>の</sup>衆 <sup>の</sup>ハリスティアニンの <sup>の</sup>爲 <sup>に</sup>に 禱 <sup>る</sup>る、



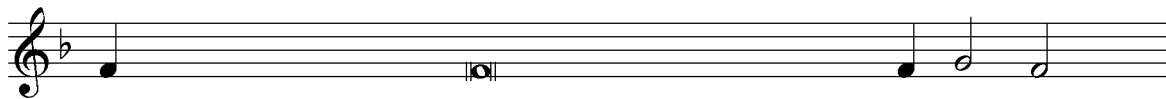
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>けだしなんぢ</sup>蓋 <sup>じんじ</sup>爾 <sup>ひと</sup>は <sup>あい</sup>仁 慈 <sup>かみ</sup>に して <sup>われら</sup>人 <sup>なんぢち</sup>を <sup>こ</sup>愛 <sup>せいしん</sup>す <sup>けん</sup>る <sup>いま</sup>神 乃 <sup>の</sup>り、<sup>の</sup>我 等 <sup>の</sup>光 榮 <sup>の</sup>を <sup>の</sup>爾 <sup>の</sup>父 <sup>と</sup>と <sup>の</sup>子 <sup>と</sup>と <sup>の</sup>聖 神 <sup>に</sup>に 獻 <sup>ず</sup>ず、<sup>の</sup>今 也

<sup>いつ</sup>何 時 <sup>よよ</sup>も <sup>の</sup>世 世 <sup>に</sup>に、



ア ミ ン。



し ん ぶ よ、しゅ の な を も っ て ふ く を く だ せ。  
神 父 主 名 以 福 降

司祭) <sup>こうえい</sup>光 榮 <sup>いつせい</sup>は <sup>いのち</sup>一 性 <sup>ほどこ</sup>に して <sup>わか</sup>生 命 <sup>せいさんしゃ</sup>を <sup>き</sup>施 <sup>いま</sup>す <sup>いつ</sup>分 <sup>よよ</sup>れ ざ る <sup>の</sup>聖 三 者 <sup>に</sup>に 歸 <sup>す</sup>す、<sup>の</sup>今 也 何 時 也 世 世 也 也、



ア ミ ン。

【 六段聖詠 】 (晩堂課から続く時、ここから始める)

誦經) <sup>いとたかき</sup>至 <sup>こうえいかみ</sup>高 <sup>き</sup>に 是 <sup>ち</sup>光 榮 <sup>へいあんくだ</sup>神 <sup>ひと</sup>に 歸 <sup>めぐみ</sup>し、<sup>のぞ</sup>地 <sup>のぞ</sup>に 是 <sup>のぞ</sup>平 安 <sup>のぞ</sup>降 <sup>のぞ</sup>り、<sup>のぞ</sup>人 <sup>のぞ</sup>に 是 <sup>のぞ</sup>恵 <sup>のぞ</sup>は 臨 <sup>のぞ</sup>めり。

至 <sup>のぞ</sup>高 <sup>のぞ</sup>に 是 <sup>のぞ</sup>光 榮 <sup>のぞ</sup>神 <sup>のぞ</sup>に 歸 <sup>のぞ</sup>し、<sup>のぞ</sup>地 <sup>のぞ</sup>に 是 <sup>のぞ</sup>平 安 <sup>のぞ</sup>降 <sup>のぞ</sup>り、<sup>のぞ</sup>人 <sup>のぞ</sup>に 是 <sup>のぞ</sup>恵 <sup>のぞ</sup>は 臨 <sup>のぞ</sup>めり。

至 <sup>のぞ</sup>高 <sup>のぞ</sup>に 是 <sup>のぞ</sup>光 榮 <sup>のぞ</sup>神 <sup>のぞ</sup>に 歸 <sup>のぞ</sup>し、<sup>のぞ</sup>地 <sup>のぞ</sup>に 是 <sup>のぞ</sup>平 安 <sup>のぞ</sup>降 <sup>のぞ</sup>り、<sup>のぞ</sup>人 <sup>のぞ</sup>に 是 <sup>のぞ</sup>恵 <sup>のぞ</sup>は 臨 <sup>のぞ</sup>めり。

<sup>しゅ</sup>主 <sup>わ</sup>よ、<sup>くち</sup>我 <sup>ち</sup>が <sup>ひら</sup>唇 <sup>しか</sup>を <sup>わ</sup>啓 <sup>くち</sup>け <sup>なんぢ</sup>よ、<sup>さんび</sup>然 <sup>あ</sup>せば <sup>の</sup>我 <sup>の</sup>が <sup>の</sup>口 <sup>の</sup>は <sup>の</sup>爾 <sup>の</sup>の <sup>の</sup>讚 美 <sup>を</sup>を <sup>の</sup>揚 <sup>げ</sup>げ <sup>ん</sup>と <sup>す</sup>す。

しゅ わ くちびる ひら しか わ くち なんぢ さんび あ  
主よ、我が唇を啓けよ、然せば我が口は爾の讚美を揚げんとす。

【 第3聖詠 】

しゅ わ てき なん おお おお もの われ せ おお もの わ たましい さ かれ  
主よ、我が敵は何ぞ多き、多くの者は我を攻む、多くの者は我が靈を指して、彼は  
かみ すくい え い しか しゅ なんぢ われ まも たて われ さかえ なんぢ  
神より救を得ずと云う。然れども主よ、爾は我を衛る盾なり、私の榮なり、爾は  
わ こうべ あ わ こえ もつ しゅ よ しゅ そのせいざん われ き たま われふ い  
我が首を擧ぐ、我が聲を以て主に呼ぶに、主は其聖山より我に聴き給う。我臥し、寝ね、  
またさ しゅ われ ふせ まも めぐ われ せ ばんみん われこれ おそ しゅ  
又覺む、主は我を扞ぎ衛ればなり。環りて我を攻むる萬民は、我之を懼れざらん。主  
よ、起きよ、吾が神よ、我を救い給え。蓋爾は我が諸敵の頬を批ち、悪人の齒を折  
すくい しゅ よ なんぢ こうふく なんぢ たみ あ  
けり。救は主に依る、爾の降福は爾の民に在り。

【 第37聖詠 】

しゅ なんぢ いきどおり もつ われ せ なか なんぢ いかり もつ われ ぼつ なか けだし  
主よ、爾の憤を以て我を責むる母れ、爾の怒を以て我を罰する母れ、蓋  
なんぢ や われ き なんぢ て おも われ くわ なんぢ いかり よ わ にく いた  
爾の矢は我に刺さり、爾の手は重く我に加わる。爾の怒に依りて我が肉に傷まざ  
るところ われ つみ よ わ ほね やす え けだしわ ふほう わ こうべ あふ おもに  
る所なく、私の罪に因りて我が骨は安きを得ず、蓋我が不法は我が首に溢れ、重任の  
ごと われ あつ われ むち よ わ きずくき かつくき われかが たお しゅうじつうれ  
如く我を圧す、私の無智に依り我が傷腐れて且臭し。我屈まりて仆れんとし、終日憂  
ゆ けだしわ こし ねつ なや わ にく いた ところ われちからおとろ いた  
いて行く、蓋我が腰は熱に悩まされ、我が肉に傷まざる所なし。我力衰えて痛く  
つか わ こころ さ さけ しゅ わ ことごと ねがい なんぢ まえ あ わ なげき  
憊れ、我が心の裂くるによりて號ぶ。主よ、我が悉くの願は爾の前に在り、我が歎息  
なんぢ かく わ こころ ふる おのの わ ちから われ ぬ わ め ひかり すで われ  
は爾に隠るるなし。我が心は戦い栗き、我が力は我より脱け、我が目の光も已に我  
わ とも した もの わ きず み はな わ しんせき とお た わ  
にあるなし。我が朋と親しき者とは我が傷を見て離れ、我が親戚は遠ざかりて立つ。我が  
いのち もと もの あみ もう われ そこな ほつ もの わ ほろび い まいにちあ  
生命を覓むる者は網を設け、我を害わんと欲する者は我が淪亡のことを言いて、毎日悪  
はかりごと たく しか われ みみしい ごと き おし ごと おのれ くち ひら ここ  
しき謀を圖む、然れども我は聾の如く聴かず、唾の如く己の口を啓かず、是  
おい われ き そのくち こた ところ ひと ごと けだししゅ われなんぢ たの  
に於いて我は聞かなく、其口に答うる所なき人の如くなれり、蓋主よ、我爾を恃  
しゅわ かみ なんぢき たま われい ねが てき われ か わ あし つまづ  
む、主我が神よ、爾聴き給わん。我言えり、願わくは敵は我に勝たざらん、我が足の踏  
とき かれら われ むか ほこ たか われほとん たお われ うれい つね わ まえ あ  
く時、彼等は我に向いて誇り高ぶる。我殆ど仆れんとす、私の憂は常に我が前に在  
われ わ ふほう みと わ つみ ため はなはだかなし わ てき い いよいよつよ ゆえ  
り。我は我が不法を認め、我が罪の爲に甚哀む。我が敵は生きて愈強く、故な  
われ にく もの ますますおお あく もつ われ ぜん むく もの わ ぜん したが よ  
くして我を疾む者は益多し、悪を以て私の善に報ゆる者は、我が善に従うに因り

われ てき しゅわ かみ われ す なか われ とお なか しゅわれ きゅうしゅ  
て我の敵となれり。主我が神よ、我を遣つる母れ、我に遠ざかる母れ、主我の救主よ、  
すみやか きた われ すく たま  
速に來りて我を救い給え。

【 第62聖詠 】

かみ なんぢ われ かみ われあかつき なんぢ たづ わ たましい かわ なんぢ のぞ わ  
神よ、爾は我の神なり。我 暁より爾を尋ぬ、我が 靈は渴きて爾を望み、我  
み むな かわ みづ ち いた なんぢ した なんぢ ちから なんぢ こうえい  
が身は空しくして燥ける水なき地にありて、痛く爾を慕う、爾の能力と爾の光榮と  
み ため わ かつ なんぢ せいしよ み ごと けだしなんぢ あわれみ いのち まさ わ くち  
を見ん爲なり、我が曾て爾を聖所に觀しが如し、蓋 爾の愛憐は生命に愈る。我が口  
なんぢ さんび か ごと われい ときなんぢ あが ほ なんぢ な よ わ て あ  
爾を讚美せん。是くの如く我生ける時 爾を崇め讚め、爾の名に依りて我が手を擧げん。  
わ たましい あ あぶら もつ ごと わ くちよろこび こえ なんぢ さんび どこ  
我が 靈の飽かさること脂油を以てするが如く、我が口 飲の聲にて 爾を讚美す、榻  
なんぢ きおく やこう なんぢ おも とき あ けだしなんぢ われ たすけ なんぢ つばさ かげ  
にて 爾を記憶し、夜更に 爾を思う時に在り。蓋 爾は我の扶助なり、爾が翼の蔭  
おい われよろこ わ たましい した なんぢ つ なんぢ みぎ て われ たす かわ  
に於て我 欣ばん、我が 靈は親しく 爾に付き、 爾の右の手は我を扶く。彼の我が  
たましい そこな はか もの ち ふか ところ くだ かれらやいば かか きつね えもの  
靈を害わんことを謀る者は地の深き處に降らん、彼等刃に攫りて、狐の獲物と  
ただおう かみ ため たのし およ かれ もつ ちか もの ほまれ え けだしつわり い  
ならん。惟王は神の爲に樂まん、凡そ彼を以て誓う者は譽を得ん、蓋 謊を言う  
もの くち ふさ  
者の口は塞がれんとす。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

かみ こうえい なんぢ き  
ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は 爾に歸す。

かみ こうえい なんぢ き  
ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は 爾に歸す。

かみ こうえい なんぢ き  
ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は 爾に歸す。

(後三段は省略)

【 大聯禱 】

われらあんわ しゅ いの  
司祭) 我等安和にして主に禱らん、



うえ くだ あんわ われら たましい すくい ため しゅ いの  
司祭) 上より降る安和と我等が 靈の救の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>ぜんせかい あんわ かみ せい</sup> 全世界の安和、<sup>しよきようかい けんりつ およ</sup> 神の聖なる諸 教會の堅立、<sup>しゆうじん ごういつ ため</sup> 及び衆 人の合一の爲に<sup>しゅ いの</sup>主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>こ せいどう およ</sup> 此の聖堂、<sup>しん つつしみ かみ おそ</sup> 及び信と 慎 と神を畏るる心 とを<sup>こころ もつ</sup>以て此に<sup>ここ</sup>来る者の爲に<sup>きた もの</sup>主に禱らん、<sup>ため しゅ いの</sup>



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>きようかい つかさど</sup> 教會を 司 <sup>そんき われら</sup> 尊貴なる我等の全 <sup>ぜんにつぼん</sup> 日本 <sup>ふしゅきよう</sup> の府 主 教 <sup>そんき われら</sup> ダニイル、<sup>せんだい だい</sup> 尊貴なる我等の仙 台の大

<sup>しゅきよう</sup> 主 教 <sup>しさい そんびん</sup> セラフィム、<sup>よ</sup> 司祭の尊 品、<sup>ほさいしよく</sup> ハリストスに<sup>ことごと</sup> 因る輔 祭 職、<sup>きようしゆう</sup> 悉 くの教 衆、<sup>およ</sup> 及び

<sup>しゆうじん</sup> 衆 人の爲に<sup>しゅ いの</sup>主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>わがくに てんのう</sup> 我國の天皇、<sup>およ</sup> 及び<sup>くに</sup> 國を 司 <sup>つかさど</sup> する者の爲に<sup>もの</sup>主に禱らん、<sup>ため しゅ いの</sup>



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>こ まち</sup> 此の都邑と <sup>およ</sup> 凡 <sup>まち</sup> の都邑と<sup>ちほう</sup> 地方の爲、<sup>ため</sup> 及び<sup>およ</sup> 信を以て<sup>しん</sup> 此の <sup>もつ</sup> 中 <sup>こ</sup> に居る者の爲に<sup>うち</sup> 主に禱らん、<sup>お もの</sup> 及び<sup>ため しゅ いの</sup>



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>きこうじゅんわ</sup> 氣候順和、<sup>ごこくほうじょう</sup> 五穀 豊 穰、<sup>てんかたいへい</sup> 天下泰 平の爲に<sup>ため</sup> 主に禱らん、<sup>しゅ いの</sup>



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>こうかい</sup> 航海する者、<sup>もの</sup> 旅行する者、<sup>りょこう</sup> 病 を患うる者、<sup>もの</sup> 艱 難に<sup>やまい</sup> 遭う者、<sup>うれ</sup> 擄 となりし者、<sup>もの</sup> 及び<sup>かんなん</sup> 及び<sup>あ</sup> 擄 となりし者、<sup>もの</sup> 及び<sup>とりこ</sup> 擄 となりし者、<sup>もの</sup> 及び<sup>およ</sup>

<sup>かれら</sup> 彼等の 救 の爲に<sup>すくい</sup> 主に禱らん、<sup>ため しゅ いの</sup>



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬが ため しゅ いの  
我等 諸 の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも  
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ  
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら  
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのち もつ かみ いたく  
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



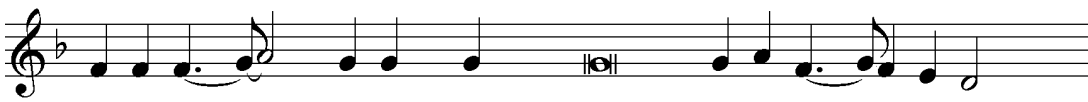
しゅ な んぢ に 。  
主 爾

司祭) けだしおよ こうえいそんきふくはい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
蓋凡そ光榮尊貴伏拝は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、



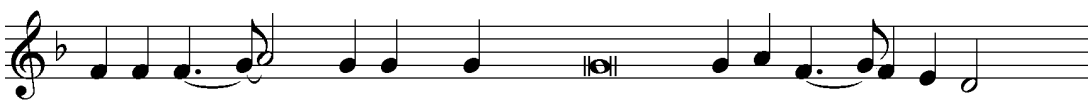
ア ミ ン。

司祭) われやちゆうわ たましい なんぢ した あした わ ちゆうしん なんぢ たづ  
我夜中我が靈にて爾を慕えり、晨より我が中心にて爾を尋ねん。



ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ 。

司祭) なんぢ しんぱん ち おこな とき よ お もの ぎ まな  
爾の審判が地に行わるる時、世に居る者は義を學ぶ。



ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ 。

司祭) ひ なんぢ てき か  
火は爾の敵を噛まん。





ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ。

司祭) <sup>しゅ なんぢすで たみ ま すで たみ ま おのれ こうえい あらわ</sup> 主よ、爾 已に民を増し、已に民を増して、己の光榮を顯せり。



ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ。

誦經) ※その週の調により替える。 ※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

第1調) <sup>われらむけい ぐん ゆうけい しるし もつ かたち うえ ぞくしん おもい のぼ せいさん</sup> 我等無形の軍の有形の徴を以て、形より上なる屬神の意思に升せられ、聖三の

<sup>うた よ さんい しんせい ひかり う ごと ゆいいち かみ よ</sup> 歌に由りて三位の神性の光を受けて、ヘルヴィムの如く惟一の神に呼ばん、

第2調) <sup>しぜんしゃ われらち あ てんじょう ぐん なら かちうた なんぢ たてまつ</sup> 至善者よ、我等地に在りて天上の軍に效いて、凱歌を爾に奉る、

第3調) <sup>いちせい わか さんしゃ さんい どうえいざい ゆいいちしゃ われらなんぢかみ てんし</sup> 一性にして分れざる三者、三位にして同永在なる惟一者よ、我等爾神に天使の

<sup>うた たてまつ</sup> 歌を奉る、

第4調) <sup>なんぢ むけい えきしゃ うた われらし もの いさみ もつ なんぢ たてまつ い</sup> 爾の無形なる役者の歌を、我等死すべき者は勇敢を以て爾に奉りて曰う、

第5調) <sup>かしょう こく きとう とし われらねつせつ ゆいいち かみ よ</sup> 歌頌の刻、祈禱の時なり、我等熱切に惟一の神に呼ばん、

第6調) <sup>ら おそれ もつ まえ た ら つつし おのの もだ こえ もつ</sup> ヘルヴィム等は畏を以て前に立ち、セラフィム等は敬み慄きて、黙さざる聲を以て

<sup>せいさん うた たてまつ かれら とも われらつみ もの よ</sup> 聖三の歌を奉る、彼等と偕に我等罪なる者も呼ぶ、

第7調) <sup>てんじょう ぐん ら かしょう しんせい こうえい うち しょてんし ふくはい</sup> 天上の軍たるヘルヴィム等に歌頌せられ、神聖なる光榮の中に諸天使に伏拜せ

<sup>かみ われらちじょう あ ふとう くち もつ なんぢ さんび たてまつ もの い たま</sup> らる神よ、我地上に在りて不當なる口を以て爾に讚美を奉る者をも納れ給え、

第8調) <sup>われらこころ てん あ てんし ひんい なら おそれ もつ しんばんしゃ まえ ふふく しょうり</sup> 我等心を天に擧げ、天使の品位に效ひて、畏を以て審判者の前に俯伏して、勝利

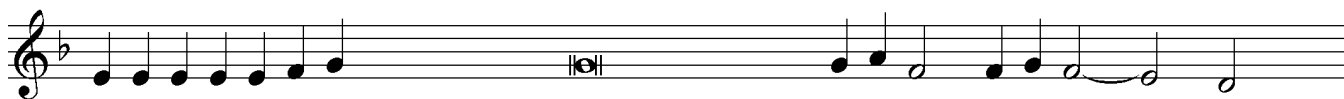
<sup>さんび よ</sup> の讚美を呼ばん、



かれら とも われら なんぢ よ  
 彼等と偕に我等も 爾に呼ぶ、



せい い、せい い、せい なる かな わが か みよ、  
 聖 い、聖 い、聖 なる 哉 吾 が 神 みよ、



なんぢがしよせいじんのかとうによりてわれらをあわれ みたま え。  
 爾 諸聖 人 祈 禱 因 我 等 憐 給 養 へ。

誦經) いま いつ よよ  
 今も何時も世に、アミン。

※その週の調により替える。 ※※※

第1調) しぜんしゃ われらさ お なんぢ ふくはい ぜんのうしゃ てんし うた もつ なんぢ よ  
 至善者よ、我等寤め興きて 爾に伏拜す、全能者よ、天使の歌を以て 爾に呼ぶ、

第2調) しゅ なんぢ われ さ とこ おこ わ ちえ こころ てら わ くち ひら なんぢ  
 主よ、爾は我を覺まして榻より起せり、我が智慧と心とを照し、我が口を開きて 爾

せいさんしゃ うた たま  
 聖三者を歌わしめ給え、

第3調) しんばんしゃにわか きた ひとびと おこない あらわ ゆえ われらやはん おそ よ  
 審判者 俄に來りて、人人の行は顯れん、故に我等夜半に畏れて呼ぶ、

第4調) かみ なんぢ むげん ちち なんぢ なんぢ しせい しん われら  
 ハリストス神よ、爾の無原なる父と、爾と、爾の至聖なる神とを、我等ヘルヴィ

ごと いさみ もつ さんえい い  
 ムの如く勇敢を以て讚榮して曰う、

第5調) どうていちよ はら い ちち ふところ はな かみ しよてんし とも われら  
 童貞女の胎に入りて、父の懷を離れざりしハリストス神よ、諸天使と偕に我等を

う たま けだしわれらよ  
 も受け給え、蓋 我等呼ぶ、

第6調) せいさん ゆいいちしゃ しんせい こんこう ごういつ おい さんえい われらてんし うた よ  
 聖三なる唯一者の神性を混淆せざる合一に於て讚榮して、我等天使の歌を呼ぶ、

第7調) ちか がた しんせい ゆいいち さんしゃ せいさん さんび たてまつ おそ もつ  
 近づき難き神性、唯一の三者に、セラフィムの聖三の讚美を奉りて、畏を以て

よ  
 呼ばん、

第8調) われらおお つみ かが あえ てん たかき あお み たましい からだ もつ ふふく  
 我等多くの罪に屈められ、敢て天の高を仰ぎ視ずして、靈と體とを以て俯伏

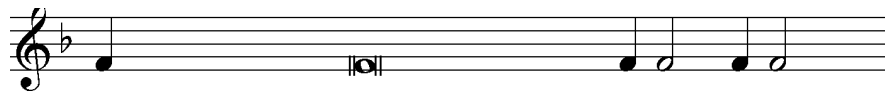
して、諸天使と偕に爾に歌を奉る、



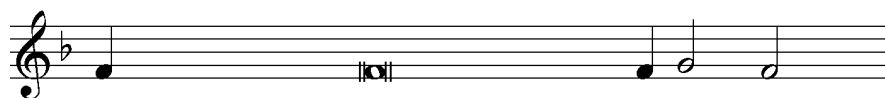
せい、せい、せいなるかなわがかみよ、  
聖い、聖い、聖哉吾神



しょうしげよによりてわれらをあわれみたまえ。  
生神女因我等



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ、  
主憐主憐主憐



こうえいはちとことせいしんにきす。  
光榮父と子聖神歸す。

誦經) 今も何時も世に、アミン。

### 【 第70聖詠 】

しゅ われなんぢ たの ねが われよよ はぢ え なんぢ ぎよ われ たす われ  
主よ、我爾を恃む、願わくは我世に羞を得ざらん。爾の義に縁りて我を援け、我

を免れしめ、爾の耳を我に傾けて我を救い給え。我が爲に堅固なる避所となりて、

われ つね かく え たま なんぢわれ すく めい けだしなんぢ わ かため わ  
我に常に隠るるを得しめ給え、爾我を救わんことを命ぜり、蓋爾は我が防固、我が

ちから わ かみ われ あくしゃ て ふほうしゃおよ はくがいしゃ て すく たま けだししゅ  
能力なり。我が神よ、我を悪者の手より、不法者及び迫害者の手より救い給え、蓋主

かみ なんぢ われ のぞみ わ いとけな われ たのみ われはら とき なんぢ まも  
神よ、爾は私の望なり、我が幼きより私の恃なり。我娠まるる時より爾に護

られ、爾我を母の腹より出せり、我爾を讃め揚げて息めざらん。多くの者の爲に我

きかい ごとももの しか なんぢ われ かた のぞみ ねが わくち さんび み  
奇怪の如き者となれり、然れども爾は私の堅き望なり。願わくは我が口は讚美に満て

られて、我爾の光榮を歌い、日に爾の威嚴を歌わん。我が老ゆる時我を棄つる母れ、

わ ちからおとろ ときわれ のこ なか けだしわ てき われ ろん わ たましい うかが もの あい  
我が力衰うる時我を遺す母れ、蓋我が敵は我を論じ、我が靈を伺う者は相

はか い かみ かれ す お かれ とら すくもの かみ われ とお  
謀りて云う、神は彼を棄てたり、追いて彼を拘えよ、救う者なければなり。神よ、我に遠

ざかる母れ、我が神よ、速に我を助け給え。我が靈に仇する者は、願わくは辱し

められて消えん、我を害せんと謀る者は、願わくは辱と侮とを被らん。唯我常

なんぢ たの ますますなんぢ ほ あ わ くち なんぢ ぎ った ひび なんぢ おん った  
に爾を恃み、倍 爾を讃め揚げん。我が口は 爾の義を傳え、日に 爾の恩を傳え

けだしわれそのかず し われしゆかみ のうりよく おも なんぢ ぎ ひとりなんぢ ぎ きおく  
ん、蓋 我其数を知らず。我主神の能力を思い、爾の義、獨 爾の義を記憶せん。

かみ なんぢ わ いとけな われ おし たま われいま いた なんぢ きせき った かみ  
神よ、爾は我が 幼きより我を誨え給えり、我今に至るまで 爾の奇跡を傳う。神よ、

としお かみしろ われ す わ なんぢ のうりよく こ よ なんぢ けんのう およ  
歳老い髪白きまで我を棄てずして、我が 爾の能力を此の世に、 爾の權能を凡そ

しょうらい もの った およ かみ なんぢ ぎ きわ たか なんぢおおい こと おこな  
將來の者に傳うるに迫べ。神よ、爾の義は極めて高し、爾 大なる事を行えり、

かみ だれ なんぢ たくら え なんぢ おお かつはげ くん われ つかわ しか また  
神よ、執か 爾に比ぶるを得ん。爾は多く且厲しき苦難を我に 遣せり、然れども復

われ ち ふち ひ いだ なんぢわれ あ われ ながさ われ ち ふち ひ いだ わ  
我を地の淵より引き出せり。爾 我を擧げ、我を慰め、我を地の淵より引き出せり。我

かみ われきん もつ なんぢ なんぢ しんじつ さんえい せい もの われしつ  
が神よ、我琴を以て 爾と 爾の眞實とを讃榮せん、イズライリの聖なる者よ、我瑟

もつ なんぢ さんしょう われなんぢ うた ときわ くち よろこ なんぢ すく わ たましい  
を以て 爾を讃頌せん。我 爾に歌う時我が口は喜び、 爾が救いし我が 靈も

よろこ わ した ひび なんぢ ぎ った けだしわれ がい はか もの はぢ こうむ  
喜ぶ。我が舌は日に 爾の義を傳えん、蓋 我を害せんと謀る者は耻を被り、

はづかしめ う  
辱を受けたり。

こうえい ちち こ せいしん き  
光榮は父と子と聖神に歸す、



いまもいつもよよに、アミン。  
今 何時 世 世



アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみよ、こうえいはなんぢにきす。  
神 光 榮 爾 歸



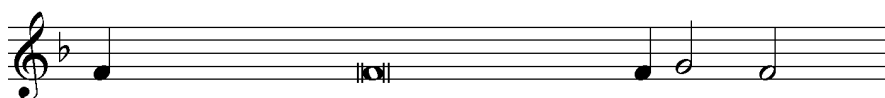
アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみよ、こうえいはなんぢにきす。  
神 光 榮 爾 歸



アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみよ、こうえいはなんぢにきす。  
神 光 榮 爾 歸



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ、  
主 憐 主 憐 主 憐



こうえいはちちとことせいしんにきす。  
光 榮 父 子 聖 神 歸

誦經) <sup>いま いつ よよ</sup> 今も何時も世に、アミン。

【 第72聖詠 】

<sup>かみ なん</sup> 神は何ぞイズライリ人に、<sup>じん こころ きよ もの じんじ</sup> 心の淨き者に仁慈なる。唯我は我が足幾んど蹶き、我が  
<sup>あゆみほとん うしな われあくしゃ あんらく み きょうぼう もの ねた けだしかれら し いた</sup> 歩 殆ど失えり、我悪者の安樂を見て、狂妄の者を嫉めり、蓋 彼等は死に至る  
<sup>くるしみ そのちから すこやか かれら ひと くらう あづか ひと とも う ゆえ</sup> まで 苦なく、其力も健なり、彼等は人の苦勞に與らず、人と偕に撃たれず。故  
<sup>きょうまん かれら めぐ くびかざり ごと きょうぼう かれら まと こるも ごと そのめ</sup> に驕慢は彼等を環ること首飾の如く、強暴は彼等を纏うこと衣の如し、其目は  
<sup>そのこ よ い そのおもい こころ うち さまよ あざけ や あく いた ざんげん</sup> 其肥えたるに因りて出で、其思は心の中に徨う、嘲りて息めず、惡を懷きて讒言  
<sup>し たか い そのくち てん あ そのした ち おうらい ゆえ しゅ たみ かしこ むか</sup> を敷き、高ぶりて言う、其口を天に騰げ、其舌は地に往來す。故に主の民も彼處に向い、  
<sup>み うつわ みづ の い かみ いか し しじょうしゃ し み</sup> 満ちたる器より水を飲みて云う、神は如何にして知らん、至上者に知ることあるか。視よ、  
<sup>こあくしゃ こよ あんらく そのたから ま われ い われあ いたづら わ こころ きよ</sup> 此の悪者は斯の世に安樂して、其財を増す。我は謂えり、我豈に徒に我が心を淨  
<sup>わ て むざい うち あら まいにちぎず う まいちようせめ こうむ あら しか われ</sup> め、我が手を無罪の中に盪い、毎日傷を受け、毎朝責を被りしに非ずや。然れども我  
<sup>も か ごと はか い われなんぢ しょし ぞく まえ つみ え われおも いか</sup> 若し此くの如く計らんと云はば、我爾の諸子の族の前に罪を得ん。我思えり、如何にし  
<sup>これ さと ただこ わ め まえ かた わ かみ せいしよ い かれら おわり さと</sup> て之を悟らん、唯是れ我が目の前に難くして、我が神の聖所に入りて、彼等の終を悟る  
<sup>およ しか なんぢかれら なめらか みち た かれら ふち おとしい なん かれら にわか</sup> に及べり。然り、爾彼等を滑なる途に立てて、彼等を淵に陥る。何ぞ彼等は俄  
<sup>やぶ き おそれ よ ほろ ゆめ さ ごと しゅ なんぢかれら さ その</sup> に壊れ、消え、懼に依りて滅びたる。夢の覺むるが如く、主よ、爾彼等を覺まして、其  
<sup>そうぞう け わ こころ わ わ ちゅうじょう さ とき われむち さと けもの</sup> 想像を消さん。我が心の沸き、我が中情の裂くる時、我無知にして悟るなく、畜の  
<sup>ごと なんぢ まえ あ しか われ つね なんぢ とも なんぢ わ みぎ て と なんぢ</sup> 如く爾の前に在りき。然れども我は常に爾と偕にし、爾は我が右の手を執る、爾  
<sup>さとし われ みちび のちわれ こうえい い てん われ だれ ち なんぢ とも</sup> の訓諭にて我を導き、後我を光榮に納れん。天には我に誰かある、地にも爾と偕に  
<sup>ねが ところ わ み わ こころ よわ かみ わ こころ かため よよ われ ぶん</sup> せば願う所なし。我が身と我が心とは弱れり、神は我が心の固なり、世に我が分  
<sup>けだしみ なんぢ とお もの ほろ およ なんぢ はな もの なんぢこれ ほろぼ われ</sup> なり。蓋視よ、爾に遠ざかる者は亡び、凡そ爾に離るる者は爾之を滅ぼす。我  
<sup>あ かみ ちか よ われしゅかみ わ たのみ お なんぢことごと しわざ</sup> に在りては神に近づくは善し。我主神に我が恃を負わせたり、爾悉くの行爲をシオ  
<sup>ちよ もん うち つた ため</sup> ンの女の門の内に傳えん爲なり。  
<sup>こうえい ちち こ せいしん き</sup> 光榮は父と子と聖神に歸す、



いまもいつもよよに、アミン。  
今 何時 世 世



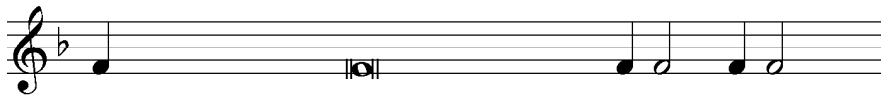
アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみよ、こうえいはなんぢにきす。  
神 光 榮 爾 歸



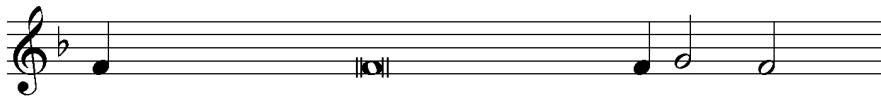
アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみよ、こうえいはなんぢにきす。  
神 光 榮 爾 歸



アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみよ、こうえいはなんぢにきす。  
神 光 榮 爾 歸



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ、  
主 憐 主 憐 主 憐



こうえいはちちとことせいしんにきす。  
光 榮 父 子 聖 神 歸

誦經) <sup>いま いつ よよ</sup>今も何時も世世に、アミン。

【 第74聖詠 】

かみ われらなんぢ さんえい なんぢ さんえい けだしなんぢ な ちか なんぢ きせき これ しめ  
神よ、我等爾を讚榮し、爾を讚榮す、蓋爾の名は近し、爾の奇跡は之を示

われとき えら ぎ もつ しんばん おこな ち これ おもの みなうご われそのはしら  
す。○我時を撰びて、義を以て審判を行わん。地と此に居る者と皆撼く、我其柱

けんご われむち もの い むち おこな なか あくしゃ い つの あ なか たか  
を堅固にせん。○我無知の者に謂う、無知を行う母れ、悪者に謂う、角を擧ぐる母れ、高

なんぢ つの あ なか かたくな かみ こと い なか けだしたか ひがし よ あら  
く爾の角を擧ぐる母れ、頑に神の事を言う母れ、蓋高くするは東に由るに非ず、

にし よ あら こうや よ あら すなわちかみ しんばんしゃ かれ ひく これ のぼ  
西に由るに非ず、曠野に由るに非ず、乃神は審判者にして、彼を卑くし、此を升す。

けだしやく しゅ て あ まじり さけ そのうち わ かれ これ く ち ことごと あくしゃ  
蓋爵は主の手に在り、混ある酒は其内に沸き、彼は之より斟む、地の悉くの悪者

そのかす しぼ これ の ただわれなが つた かみ うた ほ あくしゃ つの  
は其滓をも搾りて之を飲まん。唯我永く傳えて、イアコフの神を歌い頌めん、悪者の角

われことごと これ お ぎしゃ つの あ  
は我悉く之を折らん、義者の角は擧げられん。

こうえい ちち こ せいしん き  
光榮は父と子と聖神に歸す、



いまもいつもよよに、アミン。  
今 何時 世 世



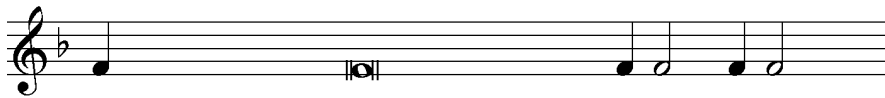
アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみよ、こうえいはなんぢにきす。  
神 光 榮 爾 歸



アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみよ、こうえいはなんぢにきす。  
神 光 榮 爾 歸



アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみよ、こうえいはなんぢにきす。  
神 光 榮 爾 歸



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ、  
主 憐 主 憐 主 憐

※ 三歌齋經を見る。「第二の誦文の後」に指定する坐誦讃詞、光榮…今も…、生神女讃詞を誦す。



【 第50聖詠 】

誦經) <sup>しゅあわれ</sup> 主 憐 <sup>しゅあわれ</sup> めよ、<sup>しゅあわれ</sup> 主 憐 <sup>しゅあわれ</sup> めよ、<sup>しゅあわれ</sup> 主 憐 <sup>しゅあわれ</sup> めよ、

<sup>こうえい</sup> 光 榮 <sup>ちち</sup> は <sup>こ</sup> 父 <sup>せいしん</sup> と <sup>き</sup> 子 <sup>いま</sup> と <sup>いつ</sup> 聖 <sup>よよ</sup> 神 <sup>に</sup> に <sup>きす</sup> 歸 <sup>す</sup>、<sup>いま</sup> 今 <sup>いつ</sup> も <sup>よよ</sup> 何 <sup>に</sup> 時 <sup>も</sup> 世 <sup>に</sup> 世 <sup>に</sup>、<sup>アミン</sup> ア <sup>ミン</sup>。

<sup>かみ</sup> 神 <sup>よ</sup>、<sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>の</sup> <sup>おお</sup> 大 <sup>なる</sup> <sup>あわれみ</sup> 憐 <sup>に</sup> に <sup>よ</sup> 因 <sup>りて</sup> 我 <sup>を</sup> 我 <sup>を</sup> <sup>なんぢ</sup> 憐 <sup>み</sup>、<sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>が</sup> <sup>めぐみ</sup> 恵 <sup>の</sup> <sup>おお</sup> 多 <sup>きに</sup> 多 <sup>きに</sup> 因 <sup>りて</sup> 我 <sup>の</sup> 我 <sup>の</sup> <sup>ふほう</sup> 不 <sup>法</sup> を <sup>け</sup> 抹

<sup>たま</sup> し <sup>しば</sup> 給 <sup>え</sup>。 <sup>しば</sup> 屢 <sup>わ</sup> 我 <sup>を</sup> 我 <sup>が</sup> <sup>ふほう</sup> 不 <sup>法</sup> より <sup>あら</sup> 洗 <sup>い</sup>、<sup>われ</sup> 我 <sup>を</sup> 我 <sup>が</sup> <sup>つみ</sup> 罪 <sup>より</sup> 清 <sup>め</sup> 給 <sup>え</sup>、<sup>たま</sup> 蓋 <sup>わ</sup> 我 <sup>は</sup> 我 <sup>が</sup> <sup>ふほう</sup> 不 <sup>法</sup> を <sup>し</sup> 知

<sup>われ</sup> る、<sup>つみ</sup> 我 <sup>の</sup> <sup>つね</sup> 罪 <sup>は</sup> 常 <sup>に</sup> <sup>わ</sup> 我 <sup>が</sup> <sup>まえ</sup> 前 <sup>に</sup> <sup>あ</sup> 在 <sup>り</sup>。 <sup>われ</sup> 我 <sup>は</sup> <sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>獨</sup> <sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>に</sup> <sup>つみ</sup> 罪 <sup>を</sup> 犯 <sup>し</sup>、<sup>おか</sup> 悪 <sup>を</sup> <sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>の</sup> <sup>め</sup> 目 <sup>の</sup> <sup>まえ</sup> 前 <sup>に</sup> <sup>おこな</sup> 行

<sup>なんぢ</sup> え <sup>り</sup>、<sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>は</sup> <sup>しんだん</sup> 爾 <sup>の</sup> <sup>ぎ</sup> 審 <sup>断</sup> に <sup>ぎ</sup> 義 <sup>に</sup> <sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>の</sup> <sup>さいばん</sup> 裁 <sup>判</sup> に <sup>おお</sup> 公 <sup>なり</sup>。 <sup>み</sup> 視 <sup>よ</sup>、<sup>われ</sup> 我 <sup>は</sup> <sup>ふほう</sup> 不 <sup>法</sup> に <sup>おい</sup> 於 <sup>て</sup> <sup>はら</sup> 妊 <sup>ま</sup>

<sup>わ</sup> れ、<sup>は</sup> 我 <sup>が</sup> <sup>つみ</sup> 母 <sup>は</sup> <sup>おい</sup> 罪 <sup>に</sup> <sup>われ</sup> 於 <sup>て</sup> 我 <sup>を</sup> <sup>う</sup> 生 <sup>め</sup> り。 <sup>み</sup> 視 <sup>よ</sup>、<sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>は</sup> <sup>こころ</sup> 心 <sup>に</sup> <sup>しんじつ</sup> 眞 <sup>實</sup> の <sup>あ</sup> ある <sup>を</sup> <sup>あい</sup> 愛 <sup>し</sup>、<sup>われ</sup> 我 <sup>が</sup> <sup>うち</sup> 衷 <sup>に</sup> <sup>おい</sup> 於 <sup>て</sup>

<sup>ちえ</sup> 智 <sup>恵</sup> を <sup>われ</sup> 我 <sup>に</sup> <sup>あらわ</sup> 顯 <sup>せ</sup> り。 <sup>もつ</sup> ヒ <sup>ソ</sup> プ <sup>を</sup> <sup>われ</sup> 以 <sup>て</sup> 我 <sup>に</sup> <sup>しか</sup> 沃 <sup>げ</sup>、<sup>われい</sup> 然 <sup>せば</sup> 我 <sup>潔</sup> <sup>く</sup> なら <sup>ん</sup>、<sup>われ</sup> 我 <sup>を</sup> <sup>あら</sup> 滌 <sup>え</sup>、<sup>しか</sup> 然 <sup>せ</sup>

<sup>われゆき</sup> ば <sup>しろ</sup> 我 <sup>雪</sup> より <sup>われ</sup> 白 <sup>く</sup> なら <sup>ん</sup>。 <sup>われ</sup> 我 <sup>に</sup> <sup>よろこび</sup> 喜 <sup>と</sup> <sup>たのしみ</sup> 樂 <sup>と</sup> <sup>き</sup> を <sup>たま</sup> 聞 <sup>かせ</sup> 給 <sup>え</sup>、<sup>しか</sup> 然 <sup>せば</sup> <sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>に</sup> <sup>お</sup> 折 <sup>られ</sup> し <sup>ほね</sup> 骨 <sup>は</sup>



よろこ なんぢ かんばせ わ つみ さ わ ことごと ふほう け たま かみ いさぎよ ころろ  
悦 ばん。爾 の 顔 を我が罪より避け、我が 盡 くの不法を抹し給え。神よ、 潔 き 心

われ つく ただ たましい われ うち あらた たま われ なんぢ かんばせ お なか  
を我に造れ、正しき 霊 を私の衷に改め給え。我を爾 の 顔 より逐うこと母れ、

なんぢ せいしん われ と あ なか なんぢ すくい よろこび われ かえ しゅさい しん  
爾 の 聖 神を我より取り上ぐる事母れ。爾 が 救 の 喜 を我に還せ、主宰たる神を

もつ われ かた たま われふほう もの なんぢ みち おし ふけん もの なんぢ かえ かみ  
以て我を固め給え。我不法の者に 爾 の 道を教えん、不虔の者は 爾 に歸らんとす。神

よ、我が 救 の 神よ、我を血より救い給え、然せば我が舌は 爾 の 義を讃め揚げん。主よ、

わ くちびる ひら しか わ くち なんぢ さんび あ けだしなんぢ まつり ほつ ほつ  
我が 唇 を啓け、然せば我が口は 爾 の 讃美を揚げん、蓋 爾 は 祭 を欲せず、欲せば

われこれ たてまつ なんぢ やきまつり よろこ かみ よろこ まつり つうかい たましい  
我此を 獻 らん、爾 は 燔 祭を喜ばず。神に喜ばるる 祭は痛悔の 霊 なり、

つうかい けんそん ころろ かみ なんぢかる たま しゅ なんぢ めぐみ よ おん  
痛悔して謙遜なる 心は、神よ、 爾 軽んじ給わず。主よ、 爾 の 恵 に因りて恩をシ

オンに垂れ、イエルサリムの 城 垣 を建て給え。其時に 爾 義の 祭、 獻 物と燔 祭と

よろこ う そのとき ひとびとなんぢ さいだん こうし そな  
を 喜 び饗けん、其時に 人人 爾 の 祭壇に 犢 を奠えんとす。

司祭) かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎょう ふく くだ たま じれん こうおん もつ なんぢ  
神よ、 爾 の 民を救い、及び 爾 の 嗣業に福を降し給え、慈憐と 洪 恩とを以て 爾

せかい のぞ せいきょう ら つの たこ われら なんぢ ゆたか あわれみ  
の世界に臨み、正 教のハリストティアニン等の角を高うし、我等に 爾 の 豊なる 憐 を

た たま しじょう われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ いのり いのち  
垂れ給え、至 淨なる我等の光 榮の女 宰・生 神女・永 貞童女マリヤの 禱 と、生命

ほどこ とうと じゅうじか ちから むけい とうと てんぐん こうえい とうと よげんしゃ ぜんく  
を 施す 尊 ぎ十字架の 力と、無形なる 尊 ぎ天軍、光 榮なる 尊 ぎ預言者・前 驅・

じゅせん こうえい さんび せいしと われら せいしんぶ せかい だいきょうし せいせいしゃ  
授 洗イオアン、光 榮にして讃美たる聖使徒、我等の聖 神父・世界の 大 教師・成 聖者・

だい しんがくしゃ きんこう われら せいしんぶ  
大ヴァシリイ、神 學者グリゴリイ、金 口イオアン、我等の聖 神父・ミラリキヤの

だいしゅきょう きせきしゃ われら せいしんぶ にほん あしと だいしゅきょう こうえい  
大 主 教・奇蹟者ニコライ、我等の聖 神父・日本の 使徒・大 主 教ニコライ、光 榮な

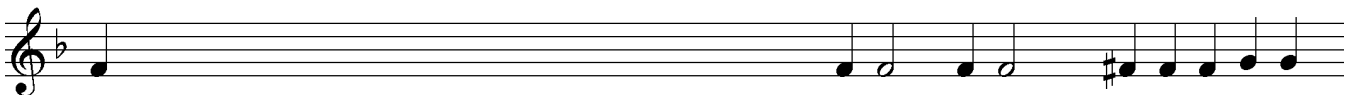
がいせん せいちめいしゃ こくしょうほうしん わ しょうしんぶ せい ぎ かみ そふぼ  
る凱 旋の聖 致命者、克 肖 捧 神なる我が諸 神父、聖にして義なる 神の祖父母イオアキム

およ およ しょせいじん てんたつ よ だいじんじ しゅ なんぢ もと われらざいにんなんぢ  
及びアンナ、及び諸 聖人の轉 達に因りて、大 仁慈の主よ、 爾 に求む、我等 罪人 爾

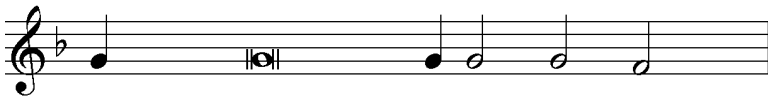
いの もの き い われら あわれ  
に 禱る者に聆き納れて、我等を 憐 めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれ めよ、しゅあわれめ、しゅあわれめ、  
主 憐 主 憐 主 憐 主 憐 主 憐



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれ めよ、しゅあわれめ、  
主 憐 主 憐 主 憐 主 憐 主 憐



しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐

司祭) <sup>なんぢ どくせいし じんじ じれん じんあい よ</sup> 爾が獨生子の仁慈と慈憐と仁愛とに因りてなり、<sup>なんぢ かれ しせいしぜん いのち ほどこ</sup> 爾は彼と至聖至善にして生命を施

<sup>なんぢ しん とも さんよう いま いつ よよ</sup> す 爾の神と偕に讃揚せらる、今も何時も世世に、



アミン。

【 規程 (カノン) 】

※三歌齋經を見る。指定する歌頌を行う。



【 小聯禱 】 (第八歌頌の前)

司祭) <sup>われらまたまたあんわ しゅ いの</sup> 我等復又安和にして主に禱らん、



しゅあわれめよ。  
主 憐

司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup> 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しゅあわれめよ。  
主 憐

司祭) <sup>しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ</sup> 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

<sup>しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら</sup> 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

<sup>いのち もつ かみ いたく</sup> 生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ な んぢ に。  
主 爾

司祭) <sup>けだしなんぢ われら かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ</sup> 蓋 爾は我等の神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世に、



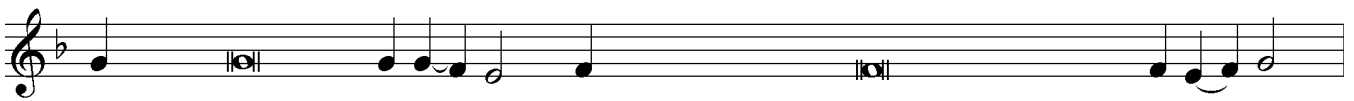
アミン。

※三歌齋經を見る。第八歌頌を行う。



【 我が心は主を崇め 】

司祭) <sup>しょうしんぢょ ひかり はは ほめうた もつ ほ あ</sup> 生神女、光の母を讃歌を以て讃め揚げん、



わがこころはしゅをあがめ、わがたましいはかみわがきゅうしゅをよろこぶ。  
我 心 主 崇 我 靈 神 我 救 主 悦



ヘルヴィムよりとうとく、セラフィムにならびなくさかえ、みさおをやぶらずし  
尊 並 榮 え 貞 操 壞



てかみことばをうみし、じつのしょうしんぢよたるなんちをあがめほむ。  
神 言 生 實 生 神 女 爾 ち 崇 め 讃 む



そのひのいやしきをかえりみたまえり、いまよりよろづよわれを  
其 婢 卑 願 給 今 萬 世 我



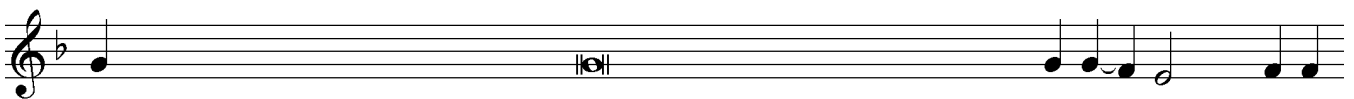
さいわいなりといわん。  
福 謂 ん



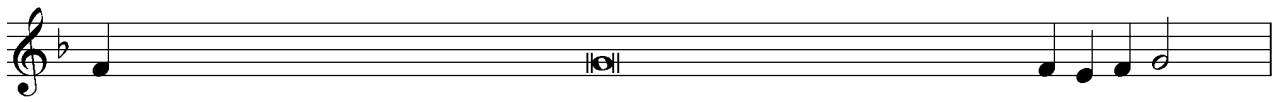
ヘルヴィムよりとうとく、セラフィムにならびなくさかえ、みさおをやぶらずし  
尊 並 榮 え 貞 操 壞



てかみことばをうみし、じつのしょうしんぢよたるなんちをあがめほむ。  
神 言 生 實 生 神 女 爾 ち 崇 め 讃 む



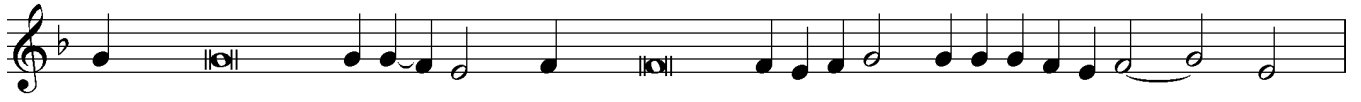
ちからをもちたまえるものはわがためにおおいなることをなせり、その  
權 能 有 給 者 我 爲 大 事 成 其



なはせいなり、そのあわれみはよよかれをおそるるものにのぞまん。  
名 聖 其 憐 世 世 彼 を 畏 者 臨



ヘルヴィムよりとうとく、セラフィムにならびなくさかえ、みさおをやぶらずし  
尊 並 榮 貞 操 壞



てかみことばをうみし、じつのしょうしんぢよたるなんぢをあがめほむ。  
神 言 生 實 生 神 女 爾 ぢ を 崇 め 讃 む。



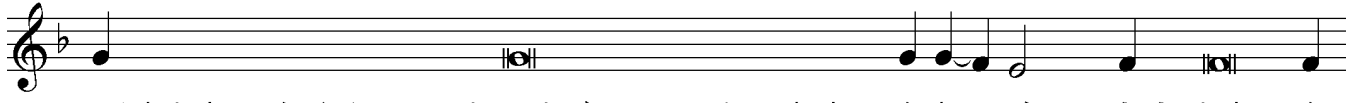
そのひぢのちからをあらわして、こころのおごれるものをちらしたまえり。  
其 臂 力 顯 心 驕 者 散 給



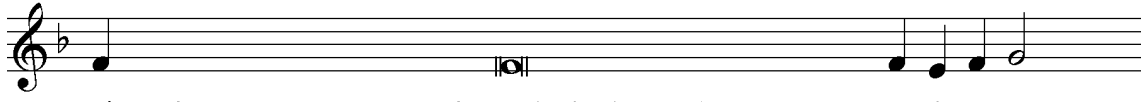
ヘルヴィムよりとうとく、セラフィムにならびなくさかえ、みさおをやぶらずし  
尊 並 榮 貞 操 壞



てかみことばをうみし、じつのしょうしんぢよたるなんぢをあがめほむ。  
神 言 生 實 生 神 女 爾 ぢ を 崇 め 讃 む。



けんあるものをくらいよりしりぞけ、いやしきものをあげ、ううるものを  
權 者 位 黜 卑 者 陟 飢 者



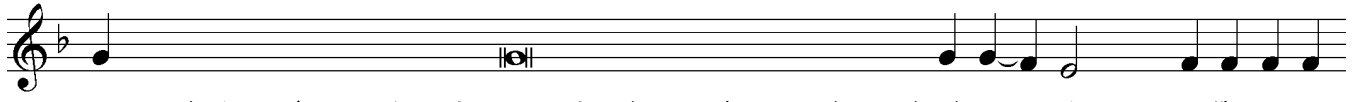
ぜんにあかせ、とめるものをむなしくかえらせたまえり。  
善 飽 富 者 空 返 給



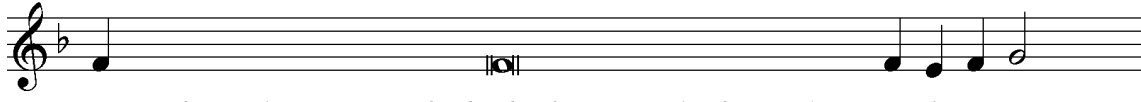
ヘルヴィムよりとうとく、セラフィムにならびなくさかえ、みさおをやぶらずし  
尊 並 榮 貞 操 壞



てかみことばをうみし、じつのしょうしんぢよたるなんぢをあがめほむ。  
神 言 生 實 生 神 女 爾 ぢ を 崇 め 讃 む。



そのぼくイズライリをいれて、わがせんぞにつげしがごとく、アヴラアムと  
其 僕 納 我 先 祖 告 如 ぐ、アヴラアムと



そのすえをよよにあわれむことをきおくしたまえり。  
其 裔 世 世 憐 記 憶 給

ヘルヴィムよりとうとく、セラフィムにならびなくさかえ、みさおをやぶらずし  
尊 並 榮 貞 操 壊

てかみことばをうみし、じつのしょうしんぢよたるなんぢをあがめほ讃む。  
神 言 生 實 生 神 女 爾 崇 讃 護 む。

※三歌齋經を見る。第九歌頌を行う。



【 常に福にして 】

つねにさいわいにして まったくきずなきしよ うしんぢよ、  
常 福 全 瑕 生 神 女、

わがかみのははなるなんぢをさんびするはまことにあたれり。  
吾 神 母 爾 讃 美 眞 眞 當 當 里。

ヘルヴィムよりとうとくセラフィムにならびなくさかえ、みさおを  
尊 並 榮 貞 操 壊

やぶらずしてかみことばをうみしじつのしょうしんぢよたるなんぢを  
壊 神 言 生 實 生 神 女 爾

あがめほ讃む。  
崇 讃 護 む。

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわしゅいの 我等復又安和にして主に禱らん、

しゅ あわれめよ。  
主 憐 れ め よ。

司祭) かみなんぢおんちようもつ われらたすすくあわれまも 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



かみ なんぢ えいざい ひかり つかわ なんぢ せいじん きとう よ わ ころ  
ハリストス神よ、爾の永在の光を遣し、爾が聖人の祈禱に因りて、我が心の  
むけい め てら われ すく たま  
無形の目を照して、我を救い給え。

いま いつ よよ  
今も何時も世に、アミン、

かみ なんぢ えいざい ひかり つかわ しょうしんぢよ きとう よ わ ころ  
ハリストス神よ、爾の永在の光を遣し、生神女の祈禱に因りて、我が心の  
むけい め てら われ すく たま  
無形の目を照して、我を救い給え。

第3調) かみ なんぢ ひかり つかわ なんぢ ぜんく きとう よ わ ころ てら  
ハリストス神よ、爾の光を遣し、爾が前驅の祈禱に因りて、我が心を照して、  
われ すく たま  
我を救い給え。

こうえい ちち こ せいしん き  
光榮は父と子と聖神に歸す、

かみ なんぢ ひかり つかわ なんぢ せいじん きとう よ わ ころ てら  
ハリストス神よ、爾の光を遣し、爾が聖人の祈禱に因りて、我が心を照して、  
われ すく たま  
我を救い給え。

いま いつ よよ  
今も何時も世に、アミン、

かみ なんぢ ひかり つかわ しょうしんぢよ きとう よ わ ころ てら  
ハリストス神よ、爾の光を遣し、生神女の祈禱に因りて、我が心を照して、  
われ すく たま  
我を救い給え。

第4調) しゅ なんぢ せかい ひかり かがや なんぢ ぜんく きとう よ くらやみ あ わ たましい  
主よ、爾の世界に光を輝かし、爾が前驅の祈禱に因りて、幽暗に在る我が靈  
もろもろ つみ きよ われ すく たま  
を諸の罪より潔めて、我を救い給え。

こうえい ちち こ せいしん き  
光榮は父と子と聖神に歸す、

しゅ なんぢ せかい ひかり かがや なんぢ せいじん きとう よ くらやみ あ わ たましい  
主よ、爾の世界に光を輝かし、爾が聖人の祈禱に因りて、幽暗に在る我が靈  
もろもろ つみ きよ われ すく たま  
を諸の罪より潔めて、我を救い給え。

いま いつ よよ  
今も何時も世に、アミン、

しゅ なんぢ せかい ひかり かがや しょうしんぢよ きとう よ くらやみ あ わ たましい  
主よ、爾の世界に光を輝かし、生神女の祈禱に因りて、幽暗に在る我が靈  
もろもろ つみ きよ われ すく たま  
を諸の罪より潔めて、我を救い給え。

第5調) ひかり ほどこ しゅ なんぢ ひかり つかわ なんぢ ぜんく きとう よ わ ころ てら  
光を施す主よ、爾の光を遣し、爾が前驅の祈禱に因りて、我が心を照し  
われ すく たま  
て、我を救い給え。

こうえい ちち こ せいしん き  
光榮は父と子と聖神に歸す、





【 第148聖詠 】

誦經) <sup>てん しゅ ほ あ</sup>天より主を讃め揚げよ、<sup>いとたかき かれ ほ あ</sup>至高に彼を讃め揚げよ。<sup>そのことごと てんし かれ ほ あ</sup>其 悉 くの天使よ、彼を讃め揚げよ、  
<sup>そのことごと ぐん かれ ほ あ ひ つき かれ ほ あ</sup>其 悉 くの軍よ、彼を讃め揚げよ。<sup>ことごと ひか ほし かれ</sup>日と月よ、彼を讃め揚げよ、<sup>ことごと ひか ほし かれ</sup>悉 くの光る星よ、彼  
<sup>ほ あ しよてん てん てん うえ みづ かれ ほ あ しゅ な ほ あ</sup>を讃め揚げよ。諸 天の天と天より上なる水よ、彼を讃め揚げよ。<sup>けだし</sup>主の名を讃め揚ぐべし、蓋  
<sup>かれい すなわちな めい すなわちつく</sup>彼言いたれば、<sup>かれ これ た よよ いた</sup>昂 成り、命じたれば、<sup>かれ これ た よよ いた</sup>昂 造られたり、彼は之を立てて世世に至らし  
<sup>のり あた これ こ</sup>め、則を與えて之を躐えざらしめん。<sup>ち しゅ ほ あ おおうお ことごと ふち ひ あられ</sup>地より主を讃め揚げよ、大魚と 悉 くの淵、火と 霰、  
<sup>ゆき きり しゅ ことば したが ぼうふう やま ことごと おか くだもの き ことごと はくこうぼく</sup>雪と霧、主の言に従う暴風、山と 悉 くの陵、果の樹と 悉 くの栢香木、  
<sup>やじゅう もろもろ かちく は もの と とり ち しよおう ばんみん ぼくはく ち しよゆうし しようれん</sup>野獣と 諸 の家畜、匍う物と飛ぶ鳥、地の諸王と萬民、牧伯と地の諸有司、少年  
<sup>しよぢよ おきな わらべ しゅ な ほ あ</sup>と處女、翁と童は、主の名を讃め揚ぐべし、<sup>けだしただそのな たか あ</sup>蓋 惟 其名は高く擧げられ、<sup>そのこうえい てんち</sup>其 光榮は天地  
<sup>あまね かれ そのたみ つの たか</sup>に 徧 し。彼は其 民の角を高くし、<sup>そのしよせいじん</sup>其 諸 聖人、<sup>しよし かれ した たみ さかえ</sup>イズライリの諸子、彼に親しき民の 榮  
<sup>たか</sup>を高くせり。

<sup>こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ</sup>光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

<sup>しゅわれら かみ こうえい なんぢ き われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ</sup>主我等の神よ、光榮は爾に歸す、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時  
<sup>よよ</sup>も世世に、アミン。

<sup>こうえい なんぢ われら ひかり あらわ しゅ き</sup>光榮は爾、我等に光を顯せる主に歸す。

<sup>いとたかき こうえいかみ き ち へいあんくだ ひと めぐみのぞ しゅてん おう かみちち</sup>至高には光榮神に歸し、地には平安降り、人には恵臨めり。主天の王、神父  
<sup>ぜんのうしや しゅどくせい こ およ せいしん なんぢ おおい こうえい よ</sup>全能者よ、主獨生の子イイススハリストス、及び聖神よ、爾の大なる光榮に因り  
<sup>われらなんぢ あが なんぢ ほ あ なんぢ ふ おが なんぢ とうと うた なんぢ かんしゃ</sup>て、我等爾を崇め、爾を讃め揚げ、爾を伏し拜み、爾を尊み歌い、爾に感謝  
<sup>しゅかみ かみ こひつじ ちち こ よ つみ にな もの われら あわれ たま よ もろもろ</sup>す。主神よ、神の羔、父の子、世の罪を任いし者よ、我等を憐み給え、世の諸  
<sup>つみ にな もの われら いのり い たま ちち みぎ ぎ もの われら あわれ たま</sup>の罪を任いし者よ、我等の禱を納れ給え。父の右に坐する者よ、我等を憐み給え。  
<sup>なんぢ ひとりせい なんぢ ひとりしゅ かみちち こうえい あらわ もの</sup>爾は獨聖なり、爾は獨主イイススハリストス、神父の光榮を顯す者なればなり、  
アミン。

<sup>われやや なんぢ ほ あ なんぢ な よよ あが うた</sup>我夜夜に爾を讃め揚げ、爾の名を世世に崇め歌わん。

<sup>しゅ なんぢ よよわれら かくれが われかつ い しゅ われ あわれ わ たましい いや</sup>主よ、爾は世世我等の避所たり。我曾て言えり、主よ、我を憐み、我が靈を醫

たま われつみ なんぢ え しゅ なんぢ はし つ なんぢ むね おこな われ おし  
し給え、我罪を爾に得たればなり。主よ、爾に趨り附く、爾の旨を行を我に教

たま なんぢ われ かみ いのち みなもと なんぢ あ われらなんぢ ひかり おい ひかり み  
え給え、爾は我の神、生命の源は爾に在ればなり、我等爾の光に於て光を觀

ん。あわれみ なんぢ しもの つね た たま  
憐を爾を知る者に恒に垂れ給え。

しゅ われ まも つみ こよ わた たま しゅわ せんぞ かみ なんぢ あが ほ  
主よ、我を守り罪なくして此の夜を度らせ給え。主吾が先祖の神よ、爾は崇め讃め

られ なんぢ な よよ とうと うた  
爾の名は世々に尊み歌わる、アミン。

しゅ なんぢ たの よ なんぢ あわれみ われら た たま しゅ なんぢ あが ほ  
主よ、爾を恃むに因りて、爾の憐を我等に垂れ給え。主よ、爾は崇め讃めらる、

なんぢ いましめ われ おし たま しゅさい なんぢ あが ほ なんぢ いましめ われ さと  
爾の誠を我に訓え給え。主宰よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠を我に悟らせ

たま せいもの なんぢ あが ほ なんぢ いましめ われ てら たま しゅ なんぢ  
給え。聖なる者よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠にて我を照し給え。主よ、爾の

あわれみ よよ あ なんぢ て つく もの す なか ほまれ なんぢ き うた なんぢ き  
憐は世々に在り、爾の手の造りし物を棄つる勿れ。讃は爾に歸し、歌は爾に歸し、

こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン。

### 【 増聯禱 】

司祭) われらしゅ まえ わ あさ いのり ま くわ  
我等主の前に吾が朝の禱を増し加えん、



司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも  
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと  
此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、



司祭) へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしゃ たま しゅ もと  
平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、



司祭) われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと  
我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、



しゅ た ま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>われら たましい ぜん</sup>我等の <sup>えき</sup>靈 <sup>こと</sup>に善にして <sup>およ せかい へいあん たま</sup>益ある事、及び世界に平安を賜わんことを <sup>しゅ もと</sup>主に求む、



しゅ た ま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ</sup>我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを <sup>しゅ もと</sup>主に求む、



しゅ た ま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>われら いのち おわり</sup>我等の生命の終 <sup>かな やまい はぢ へいあん</sup>がハリストスに <sup>およ</sup>適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びハ

<sup>おそ べ しんばん おい よろ こたえ たま もと</sup>リストスの畏る可き審判に於て宜しき對 <sup>たま もと</sup>をなすを賜わんことを求む、



しゅ た ま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ</sup>至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

<sup>しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら</sup>諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

<sup>いのち もつ かみ いたく</sup>生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ な んぢ に 。  
主 爾

司祭) <sup>けだしなんぢ じんじ じれん じんあい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま</sup>蓋爾は仁慈と慈憐と仁愛との神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今

<sup>いつ よよ</sup>も何時も世に、



ア ミ ン。

司祭) <sup>しゅうじん へいあん</sup>衆人に平安、



な んぢの し んに も 。  
爾 神

司祭) <sup>われら こうべ しゅ かが</sup> 我等の首を主に屈めん、



司祭) (黙誦: <sup>せい しゅ たか お いやし のぞ なんぢ み ところ め ばんぶつ かんがみ</sup> 聖なる主、高きに居り 卑きを臨み、爾が見ざる所なき目にて萬物を鑒る  
<sup>もの われら ころ からだ くび なんぢ まえ かが なんぢ いの なんぢ み て</sup> 者よ、我等心と體との項を爾の前に屈めて爾に禱る、爾が見えざる手を  
<sup>なんぢ せい すまい の われらしゅうじん ふく くだ たま われら じゅうあるい</sup> 爾が聖なる住居より伸べて、我等衆人に福を降し給え、我等に自由或は  
<sup>じゅう おか つみ なんぢぜん ひと あい しみ よ これ ゆる</sup> 自由ならずして犯しし罪あらば、爾善にして人を愛する神なるに依りて之を赦  
<sup>われら こんせらいせ しょぜん あた たま</sup> して、我等に今世來世の諸善を與え給え、)

<sup>けだしわ しみ われら あわれ すく なんぢ き われらこうえい なんぢちち こ せいしん</sup> 蓋我が神よ、我等を憐みて救うこと爾に歸す、我等光榮を爾父と子と聖神に

<sup>けん いま いつ よよ</sup> 獻ず、今も何時も世に、



※ 三歌齋經を見る。指定された挿句讃詞、致命者讃詞、光榮…今も…、生神女讃詞。句は次の通り。

① <sup>しゅ つと なんぢ あわれ もつ われら あ しか われらしょうがいよこ たのし なんぢ</sup> 主よ、夙に爾の憐みを以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂まん。爾  
<sup>われら う ひ われら わざわい あ とし か われら たのし たま ねが なんぢ わざ</sup> 我等を撲ちし日、我等が禍に遭いし年に代えて、我等を樂ましめ給え。願わくは爾の工作  
<sup>なんぢ しょぼく あらわ なんぢ こうえい その しょし あらわ</sup> は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其の諸子に著れん。

② <sup>ねが しゅわ しみ めぐみ われら あ ねが わて わざ われら たす たま わて</sup> 願わくは主吾が神の恵は我等に在らん、願わくは我が手の工作进行を我等に助け給え、我が手の  
<sup>わざ たす たま</sup> 工作进行を助け給え。



誦經) <sup>しじょうしゃ しゅ さんえい なんぢ な うた なんぢ あわれみ あさ の なんぢ まこと よる</sup> 至上者よ、主を讚榮し、爾の名に歌い、爾の憐を朝に宣べ、爾の眞を夜に  
<sup>の び</sup> 宣ぶるは美なるかな。

しじょうしゃ しゅ さんえい なんぢ な うた なんぢ あわれみ あさ の なんぢ まこと よる  
至上者よ、主を讃榮し、爾の名に歌い、爾の憐を朝に宣べ、爾の眞を夜に

の び  
宣ぶるは美なるかな。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち ゆる  
至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を赦

せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ  
主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

てん いま われら ちち ねがわく なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん  
天に在す我等の父よ、願は爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天

に行わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に

おいめ もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いざない みちび なおわれら  
債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我等

きょうあく すく たま  
を凶惡より救い給え。

司祭) けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。



アミン。

誦經) しょうしんぢょ てん もん われらなんぢ こうえい どう た ころろ てん た ごと いの  
生神女、天の門よ、我等爾が光榮の堂に立つに、意は天に立つが如し、祈る、

われら ため なんぢ あわれみ もん ひら たま  
我等の爲に爾が憐の門を開き給え。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ  
主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

ヘルヴィムより とうと ならび さか みさお やぶ かみことば う じつ  
尊く、セラフィムに並なく榮え、貞操を壊らずして神言を生みし實の

しょうしんぢょ なんぢ あが ほ  
生神女たる爾を崇め讃む。

しんぷ しゅ な も ふく くだ  
神父よ、主の名を以て福を降せ。

司祭) 永<sup>えいざい</sup>在<sup>しゅ</sup>の主ハリストス我等<sup>われら</sup>の神<sup>かみ</sup>は恒<sup>つね</sup>に崇<sup>あが</sup>め讃<sup>ほ</sup>めらる、今<sup>いま</sup>も何時<sup>いつ</sup>も世<sup>よ</sup>世<sup>よ</sup>に、



アミン。

誦經) 天<sup>てん</sup>の王<sup>おう</sup>よ、我<sup>わ</sup>が國<sup>くに</sup>を佑<sup>たす</sup>け、正<sup>せい</sup>教<sup>きょう</sup>を固<sup>かた</sup>め、異<sup>い</sup>教<sup>きょう</sup>を順<sup>したが</sup>わせ、世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>を穩<sup>おだ</sup>やかにし、克<sup>よ</sup>く此<sup>こ</sup>の聖<sup>せい</sup>堂<sup>どう</sup>を護<sup>まも</sup>り、已<sup>すで</sup>に過<sup>す</sup>ぎ去<sup>さ</sup>りし我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>の諸<sup>しよ</sup>父<sup>ふ</sup>兄<sup>けい</sup>弟<sup>てい</sup>を義<sup>ぎ</sup>人<sup>じん</sup>の住<sup>すま</sup>居<sup>い</sup>に置<sup>お</sup>き、並<sup>なら</sup>び我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>の痛<sup>つう</sup>悔<sup>かい</sup>と承<sup>う</sup>けとめ、い<sup>い</sup>たま<sup>たま</sup>なんぢ<sup>なんぢ</sup>じんじ<sup>じんじ</sup>ひと<sup>ひと</sup>あい<sup>あい</sup>しゅ<sup>しゅ</sup>爾<sup>に</sup>は仁<sup>に</sup>慈<sup>じ</sup>にして人<sup>を</sup>を愛<sup>を</sup>する主<sup>を</sup>なればなり。

### 【 聖エフレムの祝文 】

司祭) 主<sup>しゅ</sup>、吾<sup>わ</sup>が生命<sup>いのち</sup>の主<sup>しゅ</sup>宰<sup>さい</sup>よ、怠<sup>おこ</sup>たり情<sup>じやう</sup>と、愁<sup>も</sup>悶<sup>だえ</sup>と、陵<sup>しの</sup>駕<sup>ぎ</sup>と、空<sup>むだ</sup>談<sup>ごと</sup>の情<sup>じやう</sup>を我<sup>こ</sup>に與<sup>ころ</sup>うる勿<sup>われ</sup>れ。

貞<sup>み</sup>操<sup>さお</sup>と、謙<sup>へ</sup>遜<sup>りくだ</sup>と、忍<sup>こ</sup>耐<sup>らえ</sup>と、愛<sup>あい</sup>の情<sup>じやう</sup>を我<sup>こ</sup>爾<sup>ころ</sup>の僕<sup>われ</sup>に與<sup>な</sup>え給<sup>あた</sup>え。

嗚<sup>あ</sup>呼<sup>あ</sup>、主<sup>しゅ</sup>王<sup>おう</sup>よ、我<sup>わ</sup>に我<sup>わ</sup>が罪<sup>つみ</sup>を見<sup>み</sup>、我<sup>わ</sup>が兄<sup>わ</sup>弟<sup>つみ</sup>を議<sup>わ</sup>せざるを賜<sup>け</sup>え、蓋<sup>た</sup>爾<sup>ま</sup>は世<sup>け</sup>世<sup>だ</sup>に崇<sup>し</sup>め讃<sup>ほ</sup>めらる、アミン。

めらる、アミン。

神<sup>かみ</sup>よ我<sup>われ</sup>罪<sup>ざい</sup>人<sup>にん</sup>を淨<sup>きよ</sup>め給<sup>たま</sup>え、神<sup>かみ</sup>よ我<sup>われ</sup>罪<sup>ざい</sup>人<sup>にん</sup>を淨<sup>きよ</sup>め給<sup>たま</sup>え、神<sup>かみ</sup>よ我<sup>われ</sup>罪<sup>ざい</sup>人<sup>にん</sup>を淨<sup>きよ</sup>め給<sup>たま</sup>え、

神<sup>かみ</sup>よ我<sup>われ</sup>罪<sup>ざい</sup>人<sup>にん</sup>を淨<sup>きよ</sup>め給<sup>たま</sup>え神<sup>かみ</sup>よ、我<sup>われ</sup>罪<sup>ざい</sup>人<sup>にん</sup>を淨<sup>きよ</sup>め給<sup>たま</sup>え、神<sup>かみ</sup>よ我<sup>われ</sup>罪<sup>ざい</sup>人<sup>にん</sup>を淨<sup>きよ</sup>め給<sup>たま</sup>え、

主<sup>しゅ</sup>、吾<sup>わ</sup>が生命<sup>いのち</sup>の主<sup>しゅ</sup>宰<sup>さい</sup>よ、怠<sup>おこ</sup>たり情<sup>じやう</sup>と、愁<sup>も</sup>悶<sup>だえ</sup>と、陵<sup>しの</sup>駕<sup>ぎ</sup>と、空<sup>むだ</sup>談<sup>ごと</sup>の情<sup>じやう</sup>を我<sup>こ</sup>に與<sup>ころ</sup>うる勿<sup>われ</sup>れ。貞<sup>な</sup>操<sup>みさお</sup>

と、謙<sup>へ</sup>遜<sup>りくだ</sup>と、忍<sup>こ</sup>耐<sup>らえ</sup>と、愛<sup>あい</sup>の情<sup>じやう</sup>を我<sup>こ</sup>爾<sup>ころ</sup>の僕<sup>われ</sup>に與<sup>な</sup>え給<sup>あた</sup>え。嗚<sup>あ</sup>呼<sup>あ</sup>、主<sup>しゅ</sup>王<sup>おう</sup>よ、我<sup>わ</sup>に我<sup>わ</sup>が罪<sup>つみ</sup>

を見<sup>み</sup>、我<sup>わ</sup>が兄<sup>わ</sup>弟<sup>つみ</sup>を議<sup>わ</sup>せざるを賜<sup>け</sup>え、蓋<sup>た</sup>爾<sup>ま</sup>は世<sup>け</sup>世<sup>だ</sup>に崇<sup>し</sup>め讃<sup>ほ</sup>めらる、アミン。

### 【 第一時課 】

誦經) 來<sup>きた</sup>れ、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>の王<sup>おう</sup>・神<sup>かみ</sup>に叩<sup>こう</sup>拜<sup>はい</sup>せん。

來<sup>きた</sup>れ、ハリストス・我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>の王<sup>おう</sup>・神<sup>かみ</sup>に叩<sup>こう</sup>拜<sup>はい</sup>俯<sup>ふ</sup>伏<sup>ふく</sup>せん。

來<sup>きた</sup>れ、ハリストス・我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>の王<sup>おう</sup>と神<sup>かみ</sup>の前<sup>まえ</sup>に叩<sup>こう</sup>拜<sup>はい</sup>俯<sup>ふ</sup>伏<sup>ふく</sup>せん。

### 【 第5聖詠 】

主<sup>しゅ</sup>よ、我<sup>わ</sup>が言<sup>こと</sup>ばを聽<sup>き</sup>き、我<sup>わ</sup>が思<sup>おも</sup>いを悟<sup>さと</sup>れ。我<sup>わ</sup>が王<sup>おう</sup>我<sup>わ</sup>が神<sup>かみ</sup>よ、我<sup>わ</sup>が呼<sup>よ</sup>ぶ聲<sup>こゑ</sup>を聽<sup>き</sup>き納<sup>い</sup>れ給<sup>たま</sup>え、

我<sup>われ</sup>爾<sup>なんぢ</sup>に祈<sup>いの</sup>ればなり。主<sup>しゅ</sup>よ、晨<sup>あした</sup>に我<sup>わ</sup>が聲<sup>こゑ</sup>を聽<sup>き</sup>き給<sup>たま</sup>え、我<sup>わ</sup>晨<sup>あした</sup>に爾<sup>なんぢ</sup>の前<sup>まえ</sup>に立<sup>た</sup>ちて待<sup>ま</sup>たん。

けだしなんぢ ふほう よろこ にかみ あくにん なんぢ お え ふけん もの なんぢ め まえ  
 蓋 爾は不法を喜ばざる神なり、悪人は爾に居るを得ず、不虔の者は爾が目の前に  
 とどま なんぢ およ ふほう おこな もの にく なんぢ いつわり い もの ほろぼ ざんにん  
 止らざらん、爾は凡そ不法を行う者を憎む、爾は 謊を言う者を滅さん、残忍  
 きけつ もの しゅこれ にく ただわれなんぢ あわれみ おお よ なんぢ いえ い なんぢ おそ  
 詭譎の者は主之を惡む。惟我爾が 憐の多きに倚りて爾の家に入り、爾を畏れ  
 なんぢ せいどう ふくはい しゅ わ てき ため われ なんぢ ぎ みちび わ まえ なんぢ  
 て爾が聖堂に伏拜せん。主よ、我が敵の爲に我を爾の義に導き、我が前に爾の  
 みち たいらか けだしかれら くち しんじつ かれら ころろ あくぎやく かれら のんど ひら  
 道を平にせよ。蓋彼等の口には眞實なく、彼等の心は惡逆、彼等の喉は開け  
 ひつぎ そのした こ へつら かみ かれら つみ さだ かれら そのはかりごと もつ みづか やぶ  
 たる枢、其舌にて媚び諂う。神よ彼等の罪を定め、彼等に其 謀を以て自ら敗  
 かれら ふけん はなはだ よ これ お たま かれらなんぢ さか およ なんぢ  
 れしめ、彼等が不虔の 甚しきに依りて之を逐い給え、彼等爾に逆らえばなり。凡そ爾  
 たの もの よろこ なが たのし なんぢ かれら おお まも なんぢ な あい もの なんぢ  
 を頼む者は喜びて永く樂み、爾は彼等を庇い護らん、爾の名を愛する者は爾を  
 もつ みづか ほこ けだししゅ なんぢ ぎじん ふく くだ めぐみ もつ たて ごと くれ めぐ  
 以て自ら詔らんとす。蓋主よ、爾は義人に福を降し、恵を以て盾の如く彼を環  
 らし衛ればなり。

【 第89聖詠 】

しゅ なんぢ よよ われら かくれが やまいま しょう なんぢいま ち ぜんせかい つく  
 主よ、爾は世に我等の避所たり。山未だ生ぜず、爾未だ地と全世界とを造ら  
 さき かつよ よ なんぢ かみ なんぢひと ちり かせ い ひと こ かせ  
 ざる先、且世より世までも爾は神なり。爾人を塵に歸らしめて曰う、人の子よ、歸れ  
 けだしなんぢ め まえ せんねん す さくじつ ごと やかん こう ごと なんぢ おおみづ  
 と。蓋爾が目の前には、千年は過ぎし昨日の如く、夜間の更の如し。爾は大水の  
 ごと かれら なが かれら ゆめ ごと あさ お くさ ごと あさ はな かつあお くれ  
 如く彼等を流す、彼等は夢の如く、朝に生うる草の如し、朝には花さきて且青し、暮  
 か か けだしわれら なんぢ いかり よ き なんぢ いきどおり よ おそ まど  
 には刈られて稿る。蓋我等は爾の怒に因りて消え、爾の 憤に因りて惶れ惑う。  
 なんぢ われら ふほう なんぢ まえ お われら かく こと なんぢ かんばせ ひかり まえ お  
 爾は我等の不法を爾の前に置き、我等の隠れたる事を爾が 顔の光の前に置け  
 われら ことごと ひ なんぢ いかり うち す われら わ とし うしな おと ごと わ  
 り。我等が 悉くの日は爾が怒の中に過ぎ、我等は我が歳を失うこと音の如し。我  
 とし かず しちじゅうねん あるい すこやか はちじゅうねん そのあいだ さかん とき ころろ  
 が歳の数は七十年、或は 健なれば八十年なり、其間の 壮なる時も、劬勞と  
 やまい けだしそのす すみやか われらと さ だれ なんぢ いかり ちから し また  
 疾病あり、蓋其過ぐる事 速にして、我等飛び去る。誰か爾が怒の力を知り、又  
 なんぢ おそ ほど よ なんぢ いきどおり し ねが われら わ ひ かぞ おし  
 爾を畏るる度に依りて爾の 憤を識らん。願わくは我等に我が日を算うることを教  
 ちえ ころろ え たま しゅ おもて かせ いづれ とき いた なんぢ ぼく あわれ  
 えて、智慧の心を獲しめ給え。主よ、面を回せ、何の時に至るか、爾の僕を 憐み  
 たま つと なんぢ あわれ もつ われら あ しか われらしょうがいよろこ たのし なんぢ  
 給え。夙に爾の 憐みを以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯 歡び樂まん。爾  
 われら う ひ われら わざわい あ とし か われら たのし たま ねが なんぢ  
 我等を撲ちし日、我等が 禍に遭いし年に代えて、我等を 樂ましめ給え。願わくは爾

わぎ なんぢ しょぼく あらわ なんぢ こうえい その しょし あらわ ねが しゅわ かみ  
の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其の諸子に著れん、願わくは主吾が神の

めぐみ われら あ ねが わ て わぎ われら たす たま わ て わぎ たす たま  
恵は我等に在らん、願わくは我が手の工作进行を我等に助け給え、我が手の工作进行を助け給え。

【 第100聖詠 】

われあわれみ しんばん うた しゅ なんぢ うた たてまつ われきず みち おも なんぢ  
我憐と審判とを歌わん、主よ、爾に歌を奉らん。我玷なき道を思わん、爾

いづれ ときわれ いた われきず ところ もつ わ いえ うち ゆ わ め まえ よこしま  
何の時我に至るか、我玷なき心を以て我が家の中を行かん。我が目の前には邪な

もの お ほう そむ おこない われこれ にく そ かならずわれ つ やぶ ところ  
る物を置かざらん、法に背く行は我之を疾む、其れ必我に附かざらん。壊れし心

われ とお あ もの われこれ し ひそか おのれ となり そし もの われこれ お  
は我に遠ざかり、悪しき者は我之を識らざらん。隠に己の隣を誘る者は我之を逐い、

めおご ところたか もの われこれ い わ め こ ち まこと もの かえり かれら  
目傲り、心高ぶる者は我之を容れざらん。我が目は斯の地の忠信なる者を顧みて、彼等

わ かたわら お きず みち ゆ もの われ つか ふたごころ おこな もの わ いえ  
を我が傍に居らしめん、玷なき道を行く者は我に事えん。貳心を行う者は我が家

お え いつわり い もの わ め まえ とどま あした われこ ち ことごと ふけん  
に居るを得ず、謊を言う者は我が目の前に止らざらん。晨に我此の地の悉くの不虔

しや ほろぼ およ ふほう おこな もの しゅ まち た  
者を滅して、凡そ不法を行う者を主の城邑より絶たれしめん。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

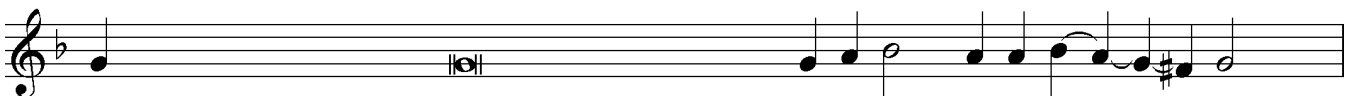
ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ  
主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、

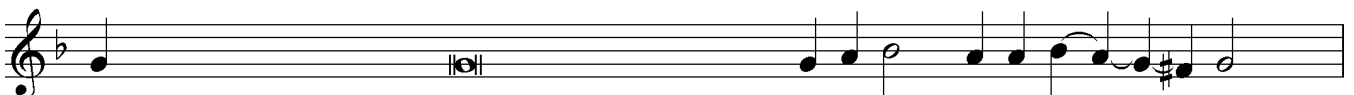
【 讚詞 】

司祭) わ おうわ かみ あした わ こえ き たま  
吾が王吾が神よ、晨に我が聲を聞き給え、



わ が お う わ が か み よ、 あ し た に わ が こ え を き き た ま え 。  
吾 王 吾 が 神 よ、 晨 に わ が 聲 を 聴 き 給 え 。

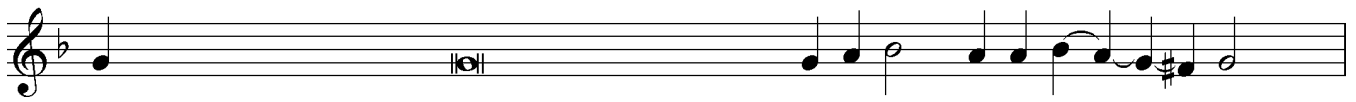
司祭) しゅ わ ことば き わ おもい さと  
主よ、我が言を聞き、我が思を悟れ、



わ が お う わ が か み よ、 あ し た に わ が こ え を き き た ま え 。  
吾 王 吾 が 神 よ、 晨 に わ が 聲 を 聴 き 給 え 。

司祭) しゅ われなんぢ いの  
主よ、我爾に禱ればなり、





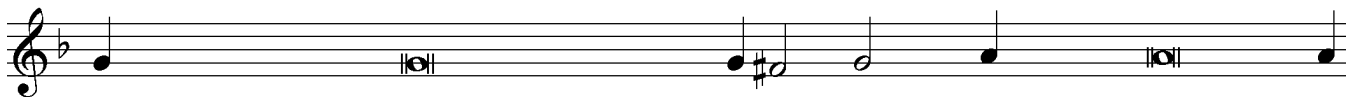
わがおうわが かみよ、あしたにわがこえをききたまえ。  
 吾王 吾神 晨 したに 我 聲 聴 きたま え。

司祭) 光榮は父と子と聖神に歸す、

誦經) 今も何時も世に、アミン。

ああおんちよう みもの われらなに もつ なんぢ しょう てん なんぢぎ ひ  
 嗚呼 恩 寵 に満たさるる者よ、我等何を以て爾を稱せんか、天とせん、爾義の日を  
 てら 照したればなり、樂園とせん、爾枯れざる花を開きたればなり、童貞女とせん、爾貞操  
 やぶ を壊らざればなり、淨き母とせん、爾聖なる懐に萬物の神たる子を抱きたればなり、  
 かれ われら たましい すくいの たま 彼に我等の靈の救われんことを祈り給え。

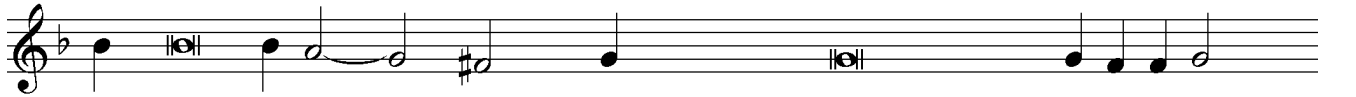
※第4週以外は次の讃詞を歌う。



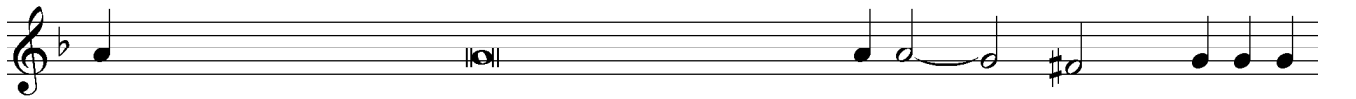
わがあしをなんぢのことばにかためたまえ、もろもろのふほうの  
 我 足 爾 言 ばに 固 め 給 え、 諸 不 法



われをせいするをゆるすなかれ。われをひとのはくがいよ  
 我 制 許 母 か れ。 我 人 の 迫 く 害



りすくいたまえ、しかせばわれなんぢのめいをまもらん。  
 救 給 え、 然 我 爾 命 を 守



なんぢがかんばせのひかりにてなんぢのぼくをてらし、なんぢの  
 爾 顔 の 光 り に て 爾 の 僕 を 照 し、 爾



おきてをわれにおしえたまえ。しゅよ、ねがわくはわが  
 律 我 に 誨 給 え。 主 願 わ 我



くちはさんびにみられて、われなんぢのこうえいをうた い、  
 口 讚 美 満 我 爾 の 光 榮 歌



ひびになんぢのいげんをうたわん。  
 日 日 爾 の 威 嚴 を 歌

※ページ下【 天主經 】へ。

※第4週、聖十字架が堂にある時は上の歌を歌わず、次の歌を歌う。



しゅさ い よ、われら な んちのじゅ うじかにふくは い し、  
主 幸 い よ、我 等 爾 んちの十 字架 伏 拜 い し、  
な んちの せい な る ふく かつ を さんえ い せ ん。  
爾 聖 復 活 讚 榮

【 天主經 】

誦經) <sup>せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ</sup>  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

<sup>せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ</sup>  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

<sup>せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ</sup>  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

<sup>こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ</sup>  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

<sup>しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち</sup>  
至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を

<sup>ゆる せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ</sup>  
赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

<sup>しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ</sup>  
主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

<sup>こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ</sup>  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

<sup>てん いま われら ちち ねが なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん</sup>  
天に在す我等の父よ、願わくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天

おこな ごと ち おこな わ にちよう かくて こんにちわれら あた たま われら  
に行 わたるが如く、地にも 行 われん。我が日用の糧を今日 我等に與え給え。我等に  
おいめ もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いぎない みちび なおわれ  
債 ある者を我等免すが如く、我等の 債 を免し給え。我等を 誘 に 導 かず、猶 我  
ら きょうあく すく たま  
等を凶 惡より救い給え。

司祭) けだしくに けんとう こうえい なんぢち こ せいしん き いま いつ よよ  
蓋 國と權能と光榮は爾 父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦經) アミン。

われらもだ ところ くち せい てんし せい いた こうえい かみ はは うた  
我等黙さず、心 と口にて聖なる天使よりも聖にして、至りて光榮なる神の母を歌い、  
これ う と しょうしんぢよ な そのじつ じんたい と かみ う つね われら たましい  
之を承け認めて生 神 女と爲す、其實に人體を取りし神を生みて、恒に我等の 靈 の  
ため いの たま  
爲に禱り給えばなり。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ  
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ  
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

いづれ ひいづれ とき てん ち こうはいさんえい かんにん こうじ しぜん ぎじん  
何の日何の時に、天にも地にも叩拜讚榮せられ、寛忍、鴻慈、至善にして、義人

あい ざいにん あわれ らいせい ふく やく よろづ もの すくい まね かみ なんぢ  
を愛し、罪人を憐み、來世の福を約して萬の者を救に招くハリストス神よ、爾

しゅ みづか わ こ とき いのり う われら いのち なんぢ いましめ むか たま われら  
主よ、親ら我が此の時の禱をも受け、我等の生命を爾の誠に向わしめ給え、我等

たましい せい からだ いさぎよ おもんばかり なお おもい きよ われら ことごと  
の靈を聖にし、體を潔くし、慮を直くし、思を淨くし、我等を悉くの

うれい わざわい やまい すく なんぢ せい てんし もつ われら めぐ われら そのかこみ まも  
憂と禍と疾より救い、爾の聖なる天使を以て我等を環り、我等が其圍に衛り

みちび しん いつ なんぢ ちか がた こうえい さと いた たま けだしなんぢ よよ  
導かれて、信の一なると爾の近づき難き光榮を悟るに至らせ給え、蓋爾は世世

あが ほ  
に崇め讃めらる、アミン。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ  
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

とうと ならび さか みさお やぶ かみことば う じつ  
ヘルヴィムより尊く、セラフィムに並なく榮え、貞操を壊らずして神言を生みし實の

しょうしんぢよ なんぢ あが ほ  
生神女たる爾を崇め讃む。

しんぶ しゅ な もつ ふく くだ  
神父よ、主の名を以て福を降せ、

司祭) かみ われら おん こうむ われら ふく くだ なんぢ かんばせ もつ われら てら ならび  
神よ、我等に恩を被らし、我等に福を降し、爾が顔を以て我等を照し、並に

われら あわれ たま  
我等を憐み給え、

誦經) アミン。

※続けて三時課を行う場合は、38ページに飛ぶ。

司祭) <sup>しゅ わ いのち しゅさい おこたり もだえ しのぎ むだごと ころろ われ あた なか</sup>  
主、吾が生命の主 宰よ、怠 惰と、愁 悶と、陵 駕と、空 談の 情 を我に與うる 勿れ。

<sup>みさお へりくんだり ころえ あい ころろ われなんじ ぼく あた たま</sup>  
貞操と、謙 遜と、忍 耐と、愛の 情 を我 爾 の僕に與え 給え。

<sup>ああ しゅおう われ わ つみ み わ けいてい ぎ たま けだしなんぢ よよ あが ほ</sup>  
嗚呼、主 王よ、我に我が罪を見、我が兄 弟を議せざるを賜え、蓋 爾 は世世に崇め讃

めらる、アミン。

<sup>かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま</sup>  
神よ我 罪人を浄め給え、神よ我 罪人を浄め給え、神よ我 罪人を浄め給え、

<sup>かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま</sup>  
神よ我 罪人を浄め給え、神よ我 罪人を浄め給え、神よ我 罪人を浄め給え、

<sup>しゅ わ いのち しゅさい おこたり もだえ しのぎ むだごと ころろ われ あた なか みさお</sup>  
主、吾が生命の主 宰よ、怠 惰と、愁 悶と、陵 駕と、空 談の 情 を我に與うる 勿れ。貞操

<sup>へりくんだり ころえ あい ころろ われなんじ ぼく あた たま ああ しゅおう われ わ つみ</sup>  
と、謙 遜と、忍 耐と、愛の 情 を我 爾 の僕に與え 給え。嗚呼、主 王よ、我に我が罪

<sup>み わ けいてい ぎ たま けだしなんぢ よよ あが ほ</sup>  
を見、我が兄 弟を議せざるを賜え、蓋 爾 は世世に崇め讃めらる、アミン。

<sup>まこと ひかり およ よ きた ひと てら かつせい もの ねが なんぢ</sup>  
眞 の 光 なるハリストス、凡そ世に来る人を照し且 聖にする者よ、願わくは 爾 が

<sup>かんばせ ひかり われら かがや われら これ よ ちか がた ひかり み え ねが</sup>  
顔 の 光 は我等に 輝き、我等は是に依りて近づき難き 光 を見るを得ん、願わくは

<sup>なんぢ しじょう はは なんぢ しょせいじん きとう よ われら あし なんぢ いましめ おこな</sup>  
爾 が至 淨の母と、爾 が諸 聖人の祈禱に因りて、我等の足を 爾 の 戒 を行うに

<sup>むか たま</sup>  
向わしめ 給え、アミン。

しょうしんぢよよ、われら なんぢの ぼくひ は わざわいよりたすけられ  
生 神女 我 等 爾 の僕 婢 は 禍 援

しをも っ て、なんぢよ くか つしょう すいにか ちうたとかんやとをたてま  
以 爾 克 勝 将 帥 に 凱 歌 と 感謝 を 奉

つる。かたれぬちからをもつによつて、われらをもろもろ  
勝 権能 有 由 我 等 諸

のくなんよりすくい、なんちをうとてよばしめたまえ、  
苦難 救 爾 歌 呼 給

よめならぬよめよ、よろこべ。  
聘女 聘女 慶

司祭) ハリストス・神・我等の<sup>かみ われら たのみ</sup> 侍よ、<sup>こうえい なんぢ き</sup> 光榮は爾に歸す、<sup>こうえい なんぢ き</sup> 光榮は爾に歸す、

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまでもいつもよよに、アミン。  
光榮 父 子 聖 神 歸 今 何時 世 世

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ、ふくをくだせ。  
主 憐 主 憐 主 憐 福 降

司祭) ハリストス我等の<sup>われら まこと かみ</sup> 眞の神は、<sup>そのしじょう はは こうえい</sup> 其至淨なる母、<sup>とうと よげんしゃ ぜんく じゅせん</sup> 光榮なる尊き預言者・前驅・授洗イ  
 オアン、<sup>こうえい</sup> 光榮にして<sup>さんび</sup> 讚美たる<sup>せいしと</sup> 聖使徒、( 某 )、<sup>せい</sup> 聖にして<sup>ぎ</sup> 義なる<sup>かみ</sup> 神の<sup>そふぼ</sup> 祖父母イオア  
 キム<sup>およ</sup> 及び<sup>およ</sup> アンナ、<sup>しよせいじん</sup> 及び諸聖人の<sup>きとう</sup> 祈禱に<sup>より</sup> 因て<sup>われら</sup> 我等を<sup>あわれ</sup> 憐み<sup>すく</sup> 救わん、<sup>かれ</sup> 彼は<sup>ぜん</sup> 善にして<sup>ひと</sup> 人を<sup>あい</sup> 愛  
 する<sup>しゅ</sup> 主なればなり、

アミン。

【 萬壽詞 】

かみよ、わがくにのてんのう、およびくにをつかさどる  
神 我 國 天皇 及 國 司

もの、われらのふしゅきょうダニイル、だいしゅきょうセラフィム、および  
者 我 等 府 主教 大 主教 及

ことごとくのせい きょうのハリストニアラ を、いくとせにもまもり  
 悉 正 教 等 幾 歳 護 り

たまえ。  
 給

※早課・一時課終わり。

※三時課を続けて行う場合

司祭) <sup>しゅ わ いのち しゅさい おこたり もだえ しのぎ むだごと ころろ われ あた なか</sup>  
 主、吾が生命の主 宰よ、怠 惰と、愁悶と、陵 駕と、空 談の 情 を我に與うる勿れ。

<sup>みさお へりくんだり ころえ あい ころろ われなんじ ぼく あた たま</sup>  
 貞操と、謙 遜と、忍 耐と、愛の 情 を我 爾 の僕に與え給え。

<sup>ああ しゅおう われ わ つみ み わ けいてい ぎ たま けだしなんぢ よよ あが ほ</sup>  
 嗚呼、主 王よ、我に我が罪を見、我が兄 弟を議せざるを賜え、蓋 爾 は世世に崇め讃

めらる、アミン。

<sup>かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま</sup>  
 神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、

<sup>かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま</sup>  
 神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、

<sup>しゅ わ いのち しゅさい おこたり もだえ しのぎ むだごと ころろ われ あた なか みさお</sup>  
 主、吾が生命の主 宰よ、怠 惰と、愁悶と、陵 駕と、空 談の 情 を我に與うる勿れ。貞操

<sup>へりくんだり ころえ あい ころろ われなんじ ぼく あた たま ああ しゅおう われ わ つみ</sup>  
 と、謙 遜と、忍 耐と、愛の 情 を我 爾 の僕に與え給え。嗚呼、主 王よ、我に我が罪

<sup>み わ けいてい ぎ たま けだしなんぢ よよ あが ほ</sup>  
 を見、我が兄 弟を議せざるを賜え、蓋 爾 は世世に崇め讃めらる、アミン。

誦經) <sup>まこと ひかり およ よ きた ひと てら かつせい もの ねが なんぢ</sup>  
 眞 の 光 なるハリストス、凡そ世に来る人を照し且 聖にする者よ、願わくは 爾 が

<sup>かんばせ ひかり われら かがや われら これ よ ちか がた ひかり み え ねが</sup>  
 顔 の 光 は我等に 輝 き、我等は是に依りて近づき難き 光 を見るを得ん、願わくは

<sup>なんぢ しじょう はは なんぢ しょせいじん きとう よ われら あし なんぢ いましめ おこな</sup>  
 爾 が至 淨の母と、 爾 が諸 聖人の祈禱に因りて、我等の足を 爾 の 戒 を行 うに

<sup>むか たま</sup>  
 向わしめ給え、アミン。

※三時課の「來れ、我等の王・・・」に続く。